

脚
功
と
罪

杉谷虎藏著

088851-000-5

26-447

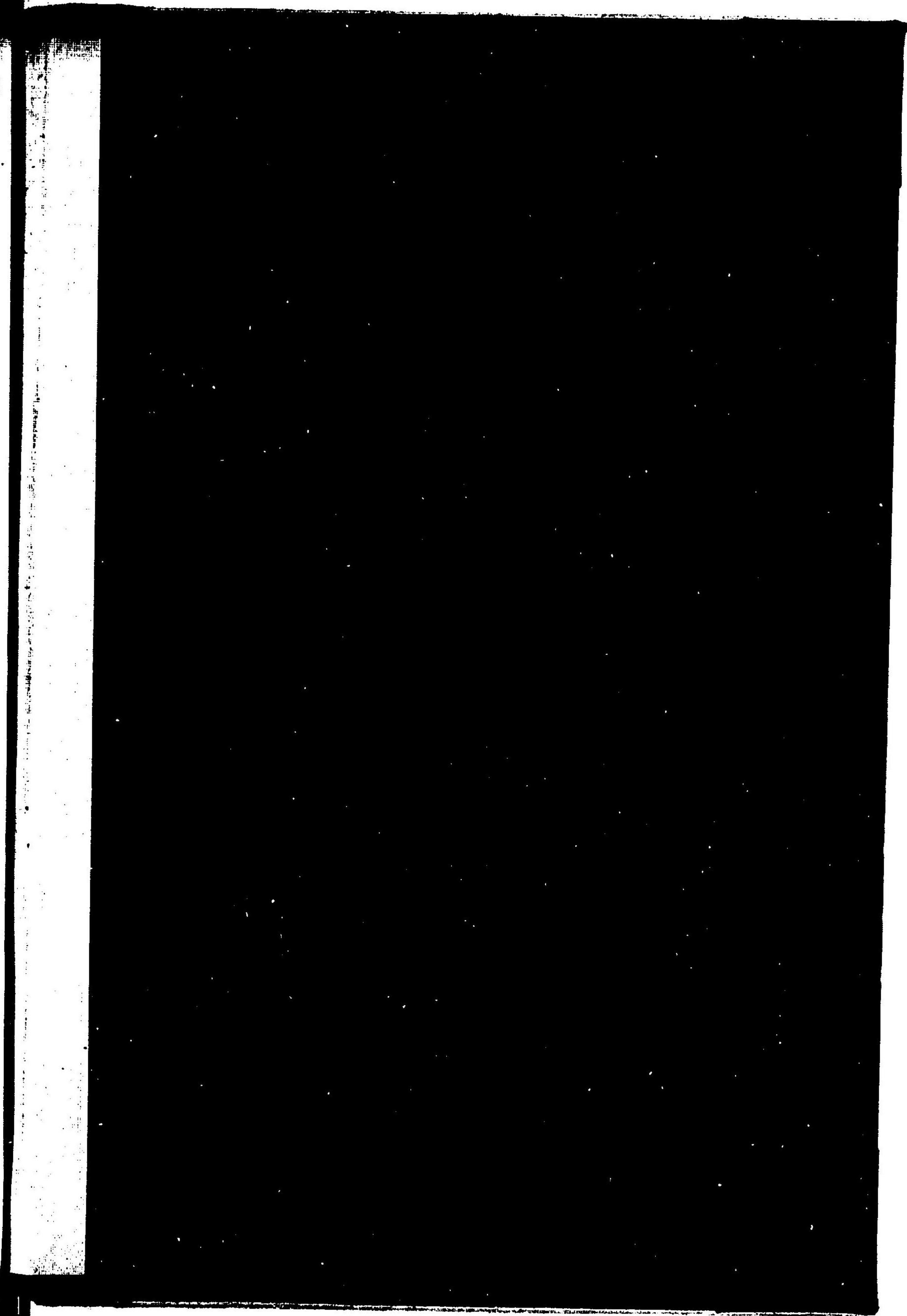
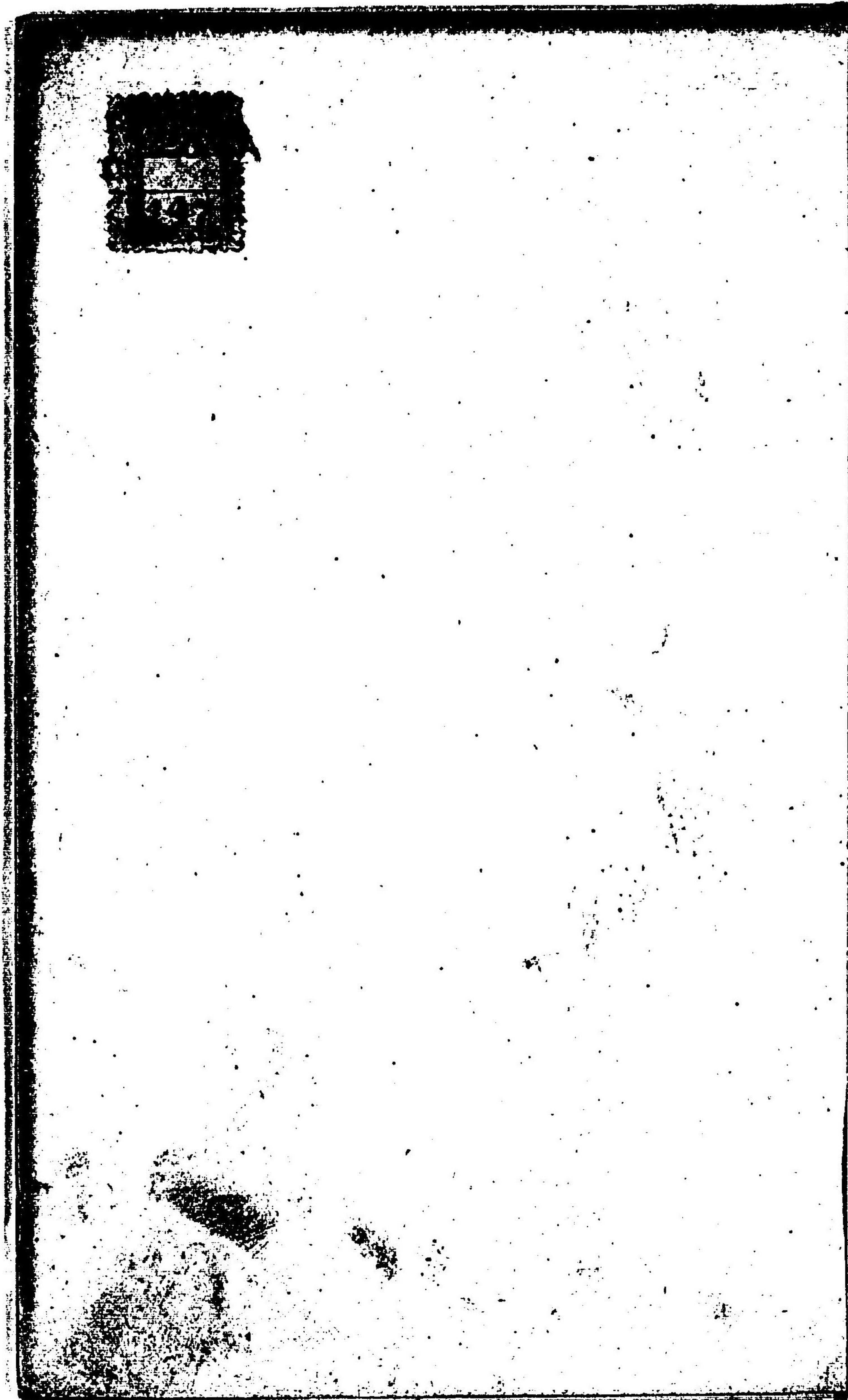
功と罪

杉谷 代水/著

M4 1

DBK-0034

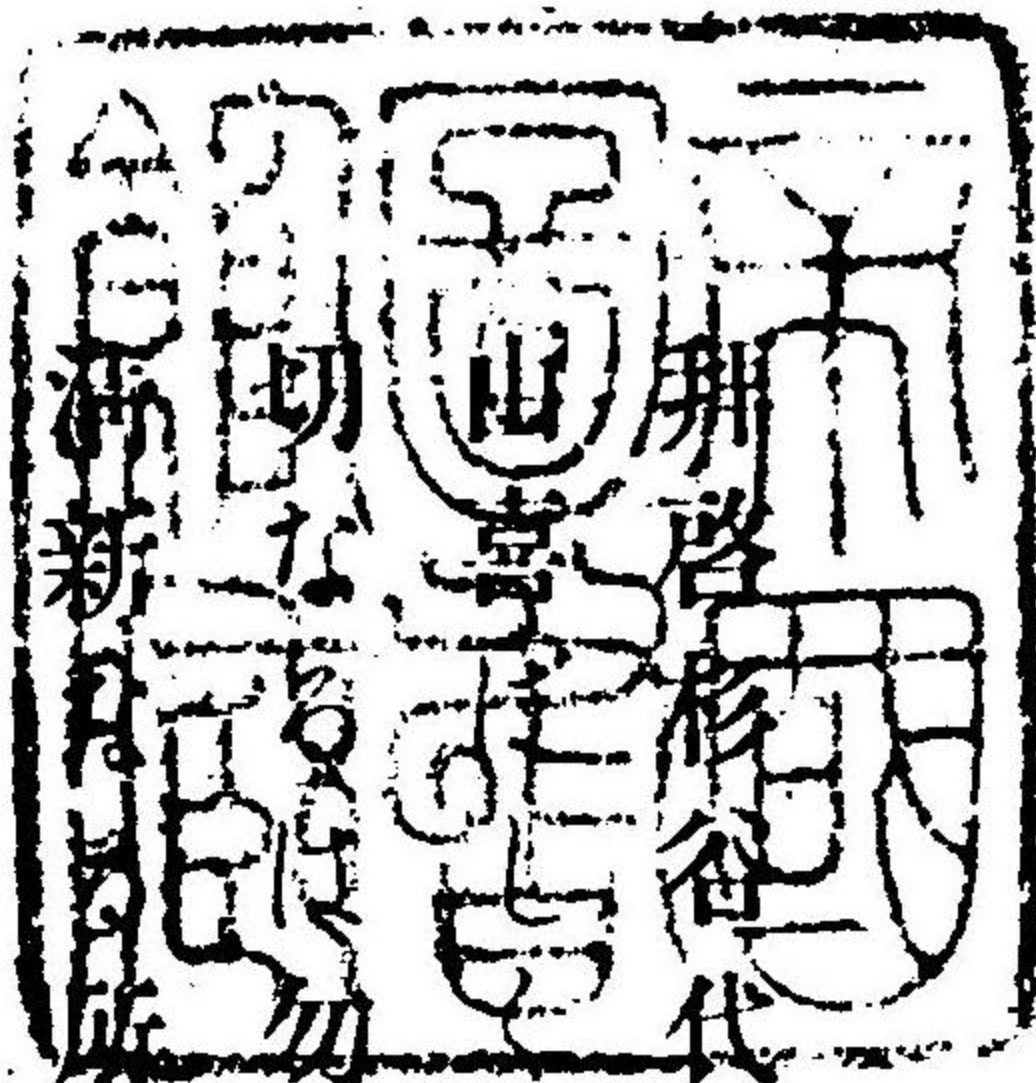




1

2





水君作功と罪彌々御出版の運びと相成
 存候同君の作は通俗教育會の御主旨に
 論文藝上より見るも着想筆致双つながら
 ありて良脚本に乏しき今の文壇に小少な
 らぬ寄與をなすものと認めらるべく候併しながら御
 會の目的及び御會の優人たちの便宜否おそらくは文
 藝の上より見るも同君の前作「盤龍山」及び佐野天聲君
 と合作たりし「常陸丸」こそ一段妙なるべかりしに過日
 の初舞臺にお用ひなかりしは遺憾に候せめても此際
 彼の二篇をも御出版ありては如何そればともあれ專

17. 9. 8
 白交

門の劇界にすら新脚本は拂底の今日に御會は既に數本の新作あり「新式機關砲」の豊かなるにも比すべきか斯の如くんば前途の大勝利豫め期すべし。此方面に於ける御初陣を祝し申候草々

十二月下旬

坪内雄藏

日高藤吉郎様

通俗教育會 教育演劇開演の由來

予は通俗教育會には何等の關係も無きものなれど、脚本をもしたる縁故あれば、會長の依頼により此度の演劇に就て大體を説明すべし。

通俗教育會は通俗なる方法によりて世教を助くるを目的とする會なり、如何なる歴史あるかは予悉しく知らず。演劇を催す事は此度が初ての由にて、會の目的に副ふべき脚本を得んことを坪内先生に請ひ、先生の紹介によりて佐野天聲君と予と二人して綴りたる「常陸丸」四幕を一番目に据ゑ、予の「盤龍山」三幕を三番目となして第一回を開演する手筈なりしが、都合によりて模様變へとなり、引續きそれに代るべき脚本を委託せられて咄嗟に書き卸したるもの此度の「功と罪」三幕なり。

元來此會の演劇は教育を主として文藝を客とす。即ち演劇の感化力を應用して現代の世道風教を裨補せんと試るものなるが故に、技藝の方針とても豫め嚴立せず、當分は在來の方式を襲用すべし。文藝協會、毎日新聞社などの試演の如く或は新文藝に貢献し或は舊文藝を保存するなごいふ目的のとは全然立場を異にせり。只ごこまでも道教に益すべき脚本に據つて教育的思想ある人士之れを演じ、開場より打出まで有益無害、娛樂の間に不知不識何等かの教育を施さん

といふ旨意なり。廣き意味の倫理的教訓と、或特別知識（主として軍事思想）の注入と、清淨なる娛樂の供給とが即ち此會演劇の看板なり。

平和克復の後ち、人心漸く倦怠し、風教日に頹敗せんとす。斯時に當り剛健なる軍事的思想を鼓吹して一は緩急の場合に備へ、一は文弱怯懦の風を鞭笞せんことは亦た無意味の舉にあらざるべし。況んや在來の演劇が動もすれば有形無形の害毒を全國郡部に流撒し、清き家庭子女の娛樂とするに堪へざる者あるに於てをや。

この度の脚本は、不手際ながら大様上述の注文に應じて綴りしものにて自から藝術を本位とせず、性格や脚色や臺詞の上に深刻美妙を希求するよりも、寧ろ道徳的趣意に於て健全ならしめんとに留意し、筋立より萬端坪内先生の懇到なる指導を受たり。又此度の伎員は大方軍人にして一二の教育家を交ふ。素人も素人、大武骨の木強漢のみなるが、生中の黒人よりも嫌味なき點に於て此の會の目的には適應すべきか。但し日露戰爭の砲戰地の餘興演劇には多少場敷を履みたるもあり、檜木舞臺にては口上の經驗も無けれど荒木舞臺の團菊、ア、ゾと喝采されしも少からず。振付その他商賈人は一人も雇はず。體育會弓術部の板の間にて、秋の長夜を稽古に徹し疲るゝを知らず、無遠慮に批評し合ひ研究しあひて出來上りし無器用細工、伎藝も在來の

方式を襲用すといふものから、その在來のさへ通せざるが多しとかや。かく臭味なき天眞の間より何等か創新なるものゝ發生することあらば愉快ならんが、そは兎も角も、本來の趣意が趣意なれば、御批評を賜はる際にも技巧の點は寧ろ第二におかれ、上述の教訓本位によつて脚本の内容舞臺の動作等すべて健全か不健全かといふ點に就いて特に御叱教を希ふ。さはいへ此會が既に演劇といふ文藝の力を借ると稱する以上は、或程度までは文藝としての價值も具へざるべからず、教訓は目的文藝は方便なれど、兩者相合致するに至らざれば十分の效果は視難きこと是れ亦た一同の覺悟せる所にして、伎員の照勉は勿論、此意味に以て始終博識なる諸君子の指導を仰がざるべからざる次第なり。

さて軍人といへ目下皆がらに現役にはあらず、體育會の教師その他の職業ありて在郷軍人も少からず、號令に練ひし喉なれば二百米突は請合なれど、何と云うても勝手ちがひの事、諸君子の同情ある指導によりて漸次目的に接近せんこと一同の熱望して己まざる所なり。

終りに伎員は決して一時の慰みにあらず、職業の傍ら飽くまでも本會の事業に粉骨し、成功を見ざれば休まる決心なり。嘗つて戦地に於て死生を俱にしたる親友なれば、其の團結は鐵丸の如く堅固なりと云々。（十一月十九日於偕行社新聞劇評家招待會席上杉谷代水口演）

目次

序幕

- 〔一〕 芝居公團 一
- 〔三〕 茶話會 一六

二幕目

- 〔一〕 發明家の書齋 三四
- 〔二〕 東砲台 六一
- 〔三〕 書齋 六五

大詰

- 私立廢兵院 七四
- ◎餘興 一〇五

脚本 功と罪

杉谷代水作



序
幕
芝公園

芝公園増上寺裏手の様。時は九月の末日暮前。
皆兵學校熱血團の學友四五人ベンチに掛け雑談の體にて幕明く。

逸見 おい齋東、荏原、馬鹿に長かつたぞ。貴様達は歸省して軟化するか

響東 軟化？ 軟化か硬化か腕を見る。

臂をまくりて力瘤を示す。

荏原 己だつて坂東太郎の荒川で、河童小僧といはれて来たんだ。貴様こそ東京に戀々として、女の後でも追うてゐたんだらう。

落帖 何、東京に戀々だ？ (二人に向ひ) 倉部、貴様はあれを聞いて黙つて居るか。

荏原 倉部ちや無い貴様の事を言つてるんだ、卑怯者。

落帖 卑怯者は手前だ、言譯してやがる。
倉部は酒の機嫌、餘人に構はず薩摩琵琶を歌鳴つてゐる下手より田舎漢二人連れ本舞臺にかゝり、

田、一 愛宕下町二丁目一番地へはアどう行きますかね。

逸見 知らん、逡巡に閉けッ。

田、一 (連れに向ひ) お逡巡さんは此處らに見えねえかなア作。

田、二 見えねえだから彼方の方へ行つて見べいよ。(小聲に) 意地の悪い書生ツ兒だ。

つぶやいて行きかゝる。

逸見 何だど？ 田舎漢め。
田、二 愛宕下町も知んねえ書生はア田舎書生だ。

逸見 何ッ？
ごステッキを取りて追つかける。兩人周章て、上手へ逃げ入る。

倉部 よせッ。つまらない。

一岡 アハ、ハ、ハ、(笑ふ)
倉部 時にマッテは何日になつた。

在 原 次の土曜ださうだ。

倉 部 フム、相手は文學院だな、ベースは巧くつてもあんなへろくはないカラに負けるぞ我校の不名誉だぞ。

落 貼 さうだ。いやに金釦を光らせやがて、重箱の蓋見たいな帽子を冠つてすまして歩く、癪にさはる奴等だ。

齊 東 全體ごつちから言ひ出したんだ、よせばいいに。

在 原 先方からださうだ。我が皆兵學校は兵式體操ばかりで、ベースは拙いつて評判だから挑戦したんだらう。守勢が拙だつてランニングとフライとでどしどしやれば譯は無い。

遇 見 大いにさうだ。あとは我々の應援で膽を潰させてやる。何、敵にも應援隊がある？ へん、應援隊の競争なら此方のものだ。短刀の鞘でも見せてやれア腰を抜かしちまう。

倉 部 日比谷のグラウンド毎日練習してをるなアあれか。

在 原 さうだ。あれア練習ぢやア無い。洒落た運動シャツを着て、様子を女學生に見せる目的だ。

倉 部 (憤慨の息入あつて) ……よしッ。ぢやア當日は己が指揮官になるから大いにやれ。

在 原 倉部が指揮官になつてくれるか。

倉 部 おれが責任を負つてやる。

齊 東 倉部が指揮官なら………(と悦ぶ)

遇 見 さうだ。萬歳！

一 同 萬歳！

上手より醫學生狭山半三郎(廿四五)鼠地の背廣、ソフトハット、細き銀金具のステッキを突き、下宿屋櫻田館の娘おふみ(十八九)、女學生風のハイカラ作り、桃色の絹ハシケチに何か包みし物を持つ(と手を引き連れて來か)

る。

お文 嫌よ、私が何時そんな事を。

狭山 たつた今ぢやないか。

お文 嘘々、嘘よ。小間物屋の女房になりたいなんて誰がいふもんですか。

狭山 誰でも無いお文ちゃんか。

お文 貴郎お願ですから、お文ちゃんて呼ばないで、文子つて云つて頂戴な。

狭山 櫻田文子嬢！

お文 いや！

狭山 では狭山文子夫人！

お文 宜いことよ。(すまして言ふ)

倉部立上り、無言のまま、横合より狭山にぶつからんとして。外れてお文を突き飛ばす。

お文 あれッ！酷いわ。

七

と立直り、倉部及一同を見てふくれ面、

お文 よくつてよ！

兩人介あつてそこく下手へはいる。

倉部等後を見送り、

倉部 ふざけやがつて、懦弱な奴等だ。

逸見 どうだい今の董の香ひは。

齋東 董？貴様は知つてをるんだな。

逸見 馬鹿を言へ。

落合 知らないで董とわかるもんか。

荏原 さうだく、ハイカラにかぶれたんだ。殿つちまへく。

と揉み合ふ所へ、お文の弟幸二(九才)上手より、

申吉 姉ちやーん、姉ちやん。どこへ行つたんだようッ、姉ちやーん、姉

やの馬鹿！

七

と今の二人を尋ね、おられて罵りつゝ來かゝる。

(入)

遠見(見て) やッ、よかちご!

落貼(幸吉に向ひ) おい、誰れを尋ねてるんだ。

幸吉 誰でもない、やッ。

在取 うむ今の廂髪（いばげ）の弟（あに）だらう。姉さんを救へてやらうか。

幸吉 何處?

在取 救へてやるからこゝへ掛けろ。

幸吉 嫌だ。

倉部(二回) おい、みんな行かんか。もう五時だぞ。

遠見(笑ひながら) 倉部はどうするんだ。

倉部 乃公は勝手だ、みんな行つて來い。

落貼 ウフ。

倉部 何が可笑しい。

落貼 何でも無い。(笑ひながら)ちや行かうか。

在取 行かう。

遠見(幸吉に) 僕が送つてやるぞ。

と手を取らんとす。幸吉嫌だ、とさきらつて逃げ

入るを、逸、齧、落、在追つかけ捕へる。幸吉ワッ

と叫ぶ。後ろより正服の巡査。

巡査 こらッ。

と一喝。幸吉は下手へ、四人は一散に花道へ逃げ込

む。

倉部は平然とベンチに掛けてゐる。

巡査立もどり、倉部をちろりと見て、

巡査 おい、お前は今の畜生の仲間ぢやらう。

倉部 仲間?

(五)

巡査 少年を捉へうとした仲間ぢやらう。

倉部 知らん。

巡査 お前の姓名は。

倉部 倉部右源太。

巡査 住處は。

倉部 赤坂茨坂町一番地陸軍大將男爵岡喬輔の邸だ。おれは岡大將の甥の

右源太だ。

巡査 何、岡大將の甥！（一寸思入あつて）イヤ大將の甥でも息子でも、警察

の眼は一樣ですが、今の事は嫌疑だけで別に證據は無し、兎も角も

含んでおきますから、今後は大將の御身分柄十分注意をなさるがよ

いでせう。

倉部 有難う。（横着に言ふ）

巡査 程かに論し、上手へ退場す。

倉部 ワハ、ハ、ハ。

だんく暗くなる模様。

花道より陸軍少佐上川晋卅三四軍服にて前に立ち、

同僚柴山不二男の妹須賀子薬瓶の包を持つと共に歩

み出で

上川 では御令兄は急にお悪いのですか。

須賀子 はい、あの先刻から、持病の腦が劇く痛み出しまして、下婢を醫者

にやりましたもあの通り耳が遠くつてわからないものですから、私

が鳥渡走りしましたので。

上川 それは御心配ですな、僕はもう御全快かと思つて居りました。今晚

も岡大將のこの同郷會で、例の機關砲の御演説があるを聞いて、

それを樂みに参るところでしたが、ではとても御出席は出来ません。

須賀子 はい、今晚は失禮にならうかと存じますわ。

上川 さうですか、全體此頃はどんな鹽梅です、醫者は何と申します。

須賀子 はい、いつもと別に變りも無いませす、お醫者様もたゞの神經衰弱だと申しますが、何でもいいますか兄は引籠りましてから神經が餘計強くなりまして、お見えのお方にも會はないで考へ込んでばかり居りました、本當に心細くつて仕様がムいませぬの。

上川 ではまだ時間も早し、御見舞ながらお伴を致しませう。

須賀子 どうも恐入ります。さういふ鹽梅でございますから、貴郎が入らし

て下されば、ごんなに悦ぶか知れませぬ。

上川 兎も角も上つて慰めて見ませう。

と本舞臺にかゝる。

倉部は先刻の狹山、お文と見錯り、又来たといふ思入、前へまはりて突然上川にぶつかる。

上川(ふり向き) 何をする！

倉部 手前こそ何だ、人によつかつて。

上川 無禮な事をするぞ免さんぞ。

倉部 生意氣な、瓢箪め、

と突き倒さんとかゝる、一寸立廻り、上川ムツと利腕を捉へ、顔を見て、

上川 や、君は倉部ぢやないか。

倉部 えつ。

と驚きの介。

上川 又か、怪しからん。

倉部(上川と知り) やつ、失策つた。

上川 何が失策つたのだ。君は岡大將の甥といひ皆兵學校の上級生で、軍人志望者の模範となるべき人間では無いが、通行の婦人を捉へて一度ならず二度三度、何といふ蠻行だ、今日は見のがすわけに行かん。

さう思ひたまへ。

倉部(周章して) 實は、その、先刻僕に無禮をした男があつて………それに

その、貴下がさういふ婦人をお連れになつて居ようとは………

上川 馬鹿を言へ、これは柴山少佐の令妹だぞ。

倉部 あつて須賀子を見て何にしる酒にも酔つてゐましたから、どうか。

上川 酔つちやゐないぢやないか、その位の事で前後を忘れたとは言はれ

ん。兎も角も君の邸へ同道しよう。

倉部 どうか今日は、もう一度。

と速りに謝つてゐる時、下手より以前の四五人引つ返

し此の體を見て、

逸見 や、倉部がやられてる。

在 何、倉部が？

齊東 倉部君々々々。

落 何だ。

と加勢にかゝらんとす。

倉部は愈々狼狽し、

倉部 あ、な、何んでも無い、あつちへ行つてくれ。

逸見 でも君。

在 見すく我々が。

倉部 間、間遠だ、行つてくれ。

齊東 間遠でも構はん、逸見、在 原ッ。

三人 さうだ。

と上川にかゝらんとす。

須賀子は心配の介、上川は須賀子を後ろにかばひて

身構へ、

倉部は一生懸命に一同を制する模様にて道具かはる。

二二 茶話會

二〇

平舞臺の廣間、赤坂英坂なる岡大將の客室にて、今宵同郷士官の茶話會あり、來會はせたる面々席順なく、此處に一團、彼處に一組、圍碁、將碁、トランプ、諸曲、さては首引、腕相撲など思ひくゞに催しゐる。

甲 やあ勝つたぞく。

乙 くそッ。今一番來い。

乙 と取組み、甲を撥ね反して、

乙 そら見ろ！

乙 と騒ぐ拍子に後ろの盤上の碁石をめちやくゞにする。

丙 こらッ、静かにやらんか。

丁 あッ、こんなに爲ちまつた。畜生、—今のは己が勝たぞ。

丙 いえ、私の勝であります。

丁 ぢやアやり直さう、此處へ來い。隣國は大戦争だから、中立地帯へ避難だ。

丙 さうです。

碁盤を持ちて端の方へゆく。

「抑、是は鞍馬の奥僧正が谷に年經てすめる大天狗也。」と諺ふ。

戊 大天狗はこゝだ。誰れなど腕相撲にやつて來い。

己 よしッ。己が行つて負かしてやらう。

己 ど、すべて無邪氣の遊び。

己 よき頃、奥より主人喬輔(和服出で來る。

甲 おいこらッ。大將閣下だぞ。

甲 一同居直る。岡は莞爾として、

岡 いや、その儘に。アハ、ハ、荒川大尉は相かはらず腕相撲の大

(七)

岡 闘ですな。

荒川 いえ、今日は坂根中佐殿にやられました。何でも非凡な戦術がある
と見えます。

岡 油断大敵ぢやな。坂根さん、わしがお相手にならうか。負けません
ぞ。

坂根 や忍入ります。

荒川 やりたまへ〜。

一岡 やれ〜。

坂根 では願ひませうか。

岡 さあ。

と兩人まん中に出で取組む。

岡 一番勝負ぢや。

坂根 はい。

岡 やつと聲かけて一気に坂根を倒す。
一同喝采。

坂根 いけません〜。まだ私の方に用意がありません。

岡 機先を制しては悪いか。

坂根 まりました。ではもう一番。今度は行司の聲で。

荒川 我輩が審判にならう。――用意！始めい。

兩人互角、と、坂根の勝になる。

一同拍手す。

岡(聲に直りて) 成程坂根中佐は新進の横綱だけある。

坂根 名譽の至りであります。

岡(腕を撫てながら) これ、誰れか茶を持って来んか。

書生、女中、茶、鹽煎餅を運ぶ。

岡(書生に向ひ) 柴山少佐はまだか。

吾生 まだお見えになりません。

岡 上川は。

吾生 上川さんもまだでムいます。

岡 うなづく、吾生去る。

岡(一同に向ひ)

今日は柴山少佐が、此度發明した機關砲の話を自身にする約束で、——イヤまだ公けにはならんが大分有力なものらしい。例の通りお構ひ申さんが、やがて来るぢやらうからゆるく遊んで下さい。

一同會釋して茶を飲むことよろしく、

柴山 柴山少佐殿は先達中ちと病氣の様に聞きました、もう御全快でありますか。

岡 全快ださうで、今日は氣晴し旁々此處で演説をして、二三日中に出動するといつてをつた。

荒川 は、ア、で、何でありますか、その機關砲は何時頃から發明に着手されたのでありますか。

岡 服部中佐、お前同窓ぢやから、説明してやつてくれ。

服部 私も上川少佐程には存じませんが、發明に着手したのは六七年以前でありませう。日露戦争の前に八九分通り出来たといつて、戦地でも隙さへあれば研究してゐた様であります、此頃いよいよ完成したものと見えます。

荒川 在來の機關砲以上の威力のものでせうか。

岡 以上どころか、餘程猛烈なものだ。それに極輕くて一人で使用が出来るさうぢや。

荒川 えッ、一人で機關砲が、では自働式でありますな。

坂根 そんな事だらうが、實に非常な發明だ。一人で操縦が出来れば攻撃用にもなるんだから、將來の戦術には大影響を及ぼす。

荒川 いかにも、其の機關砲を馬上に搭載して持ち歩くことになれば、

我々騎兵の任務も非常に擴張することになります。

工兵とてもその通りだ。歩兵の掩護が大仰でなくつて、その位仕事

が仕よくなるかわらん。

荒川 何しろ早く説明を聞きたいものであります。

同 いや、今に来るぢやらう。

書生 書生手紙を持ちて出づ。

只今柴山少佐のお宅から、使が此手紙を持参致しまして、よろしく

といふ事でまいります。

柴山少佐から使(封を切りて讀み下し)あゝ少佐は今晩来られな

うぢや。坂根中佐そこで讀んで下さい。(書生に向ひ)使は承知したと

よく言つて歸せ。

書生去る。

坂根手紙を受取りて讀む。

手紙 「肅啓かねて御命令の通り今夕の茶話會にて機關砲發明の件詳細演説致すべき心組に候ひし處正午過ぎより持病再發致し何分苦惱に堪へかね候まゝ乍恐縮缺席の御許を蒙り度偏に奉悃願候。右機關砲の儀小官の手に發明成就致せしこと抑々喜ぶべきか悲むべきか將又此度の缺席は果して不本意か否か今之れを辨する能はず、たゞ閣下の御寛容を祈る。出席の諸君へは何卒よろしく御風聲を賜はりたく候。恐惶頓首

九月廿日 砲兵少佐 柴山不二男

岡大將 虎皮下

一同貌見合せ一寸思入

服部 ふむ持病が起て缺席は解たが、終尾の文句がちつとおかしい様だな。
荒川 私よく解りませんでした。

坂根 坂根さん、そのことをもう一度。

坂根 はい(と腹を)「……………御許を蒙り度偏に奉個願候。右機關砲の儀小官の手に發明成就致せしこと抑々喜ぶべきか、悲むべきか、將又此度の缺席は果して不本意か否か、今之れを辨する能はず、出席の諸彦へは……………」

服部 おかしいぞ。

坂根 成程意味がありさうだな。

荒川 服部中佐殿は何か御承知ではありませんか。

服部 何にも知らん。

岡 (一寸思入あつて) いや又分るぢやらう、今夜は病氣の事ぢやから。皆さんも折角ぢやつたがよろしく。まゝ遊んで下さい。

服部 (小聲に) 兎に角失望した。

荒川 我々も失望しましたが仕方がありません。
坂根 では御免を蒙つて、服部中佐、又腕相撲でも始めうか。

服部は浮かぬ貌、

服部 荒川君とやりたまへ。僕は失敬しよう。(小聲に) 上川までが来ない

のは不埒だ。

坂根 上川少佐もまだ来んな。

岡 わの氣餞家が来なくては寂しい。

服部 風でも引きましたかな。

坂根 風邪位で閉口する男では無い。

一同 アハ、

服部 兎に角僕は失敬しよう。(大將に向ひ) 小官はお先に御免を蒙ります。

岡 まだ早いでは無いか。

服部 はい、出席も先頭第一でありましたから、退却も早いです。

阿 ハアさうか。

荒川 私も御免を蒙ります。

原都 君達はまア居たまへ。大將閣下に悪い。

阿 何御随意でよろしい。柴山が来なければもう何も無いのぢや。

坂根 では後先言はず一同これで失禮致しませう。次回は柴山少佐の全快

次第としておいて。

荒川 賛成。

坂根 では大將閣下。

阿 さやうか。

一同 御免を蒙ります。

と奉手の禮。一同退場。

大將は座にかへり、書生にあとを片づけさせつゝ思案の介。

引ちがへて前場の上川少佐入り来る。

阿 やあ上川か。

上川 大將閣下、遅刺致しました。

と席に就く。

阿 柴山が病氣で来んから、皆失望して歸つた所だ。

上川 さうでありましたか。イヤ柴山の事もありますが、大將閣下、今夕

は別の件で尊顔を辱しに参つたのであります。(と一咳し) 小官の類

察では全體今日の弊風に文藝と武藝の二つがあると思ひます、言ひ

換へれば文弱な弊害と野蠻な弊害、この二つが今日の青年を非常に

墮落せしめてをります。文藝は文明開化の餘毒で、薄志弱行、意地

も氣力も無い、人間の腐れであります、就中我々軍人の黙視する

に忍びんのは、彼の武藝の方面即ち野蠻な方の弊害であります。尙

武の精神を根本的に誤解して、折角勝れた體力を我儘一方に用ひ、

秩序風紀を重んぜず、他人の人格も尊重せず、到る處野蠻な行爲を遂ぐるを以て寧ろ名譽の如くに心得てをる輩がありますが、同じ亂暴も殊に今日のは卑劣極まつてをります。黨を組んで他人を脅迫し、魔力を用ひ兇器を用ひて少年を辱しめ、婦女子を捕へる——言語同断であります。

滔々と論進す。岡は不審ながら、

岡 いかにも其の通りぢやて。さういふ輩が軍人志望者に澤山ある様になる。將來の武育を衰へしめるばかりぢや。

上川 將來の武育！それでありませう。教育の事を教育家にのみ一任して置き難いといふのは即ちそれゆゑで、近頃は教育家、宗教家以外にもその點に苦心する識者が現れました。通俗教育會でも、倫理に根底を置いた將來の武育といふ事を一つの目的とするを聞きましたが、小官の今日伺ひましたのは、もつと直接した事柄で、近來武弊の事

岡 實を屢々目撃いたしました。

上川 ふむ、それは閉捨にならん事だが、お前の見たといふのは全體どういふ連中だ。

上川 他の書生もありませんが、近頃は皆兵學校の生徒の蠻行を二三回認めました。

岡 皆兵學校、これは怪しからん。宅の倉部なども入學させて置いた學校ぢやに。

上川 大將閣下、その倉部君が、實は隊長であります。

岡 えつ、倉部が、これはく驚いた次第だ。イヤ上川ちつとも知らなかつたが倉部がそんな事をした。遠慮はいらん、委しく聞かせてくれ。

上川 (息を吸つて) 實は先達でも一度同様の事を見ましたから、酷しく忠告しておきました。又今日の夕刻、閣下の處へ參る途中であります。

柴山の妹さんに遣ひまして、聞くと柴山は急に持病が起つたといふので醫者へ薬取りに行かれた歸りであります。

上川 今晩は茶話會にも出られず、非常に神經を起してをるといふ事でありますから、見舞はうと思つて一處に増上寺の裏手の處へ來ますと、一人の書生が突然木蔭から出て私共に喧嘩をふつかけて來ます。支へながら見ると倉部君でありますから、酷しく小言を言つてゐるうちに、又四五人加勢に現はれましたが、倉部君が止めたので皆散つて了りました、大將閣下人達にせよ何にせよ斯の如き事柄は單に倉部君一身の問題に止まらんかと考へます。

同 さうともく、一度ならず二度までもお前の目にかゝる様では平生が思ひやられる。よろしい、乾度處分をしてやる。
と荒々しく呼鈴を鳴らす。

同 右源太を呼べい。
書生出づ。
書生去る。

同 イヤ參謀總長の甥からしてそんな事では、他の者の制御がつかん。學校にも申譯が無い事だ。で何か柴山の妹には別條はなかつたか。

上川 はい、それは少しも。
倉部右源太頭を僥れて入り來る。

同 右源太！

倉部 は。

同 こゝへ出い。

倉部 は。

同 貴様は全體何だ。何になる考へた。乃公の甥だけに軍人志望者の模範にならねばならん人間が、身分を利用して徒黨を組み蠻行を働く、

うらたへ者め、平生暗誦させた「武教小學」に何とある。「其志す所に勤行せよ」「仁義に據れよ」とあるは何だ。武士道は恥を知るを第一とするぞ。

倉部 (面目なき思入) 今日の事は申譯がありません、以後は蛇度謹みます。謝るだけでは済まん。イヤ訓誨も無益だ、昔なら切腹を言ひつける所だぞ、國へ歸れ。

倉部 えつ。

同 勘當だ。

倉部 は。(頭を下げる)

上川 イヤ大將閣下、お耳に入つたのは只今始めてでもありますし、今日今日は小官が保證致しますから、どうか一度だけは御有免を願上します。(右源太に向ひ) 倉部君、向後は断然志を翻して、第一あんな悪友と交際を絶つて、本分を守る様にしたまへ。

倉部 低頭する。

上川 閣下、どうか御有免を願上します。

同 (思入あつて) では上川少佐の言葉に免じて勘當は赦してやる。貴様が一生浮沈の瀬戸だぞ、反省して見い。

倉部 今後は蛇度改心致します。

上川 私も十分注意してお上げ申しますから、倉部君の廉恥心を御信用下さい。

同 部屋へ行つて謹慎せい。

倉部 頭を擧げ得ざる介、

上川 倉部君、それ、

倉部 一禮して立つ。三人よろしく氣味合。

【幕】

二幕目

〔二〕 發明家の書齋

正面常足の二重を二間に仕切り、上手の一間は障子切たれど、和洋折衷の書齋、壁には地圖を掛け、床、書架、高机、額面などよろしく、主人柴山不二男が居間なり。下手は小奇麗なる茶の間造り、火鉢、茶戸棚、一閑張の小机の上に歌書、寫真ブックなどを置く。廻縁にて、前は小き裏庭のころろ、柴折戸あり。垣根に末枯たる朝顔、枝重げなる白萩、紫苑、刈萱などわざとならすあるべし。
不二男の妹須賀子小聲に琴を復習する見得にて幕明く。

(三)

〔合唱〕 「言はでおもふ、心の色を八重にしも、うつし染むてふ情なさに、春の月毛の駒とめて、いざ水かはん山ふき。己が秋とや小牡鹿の、しがらむ花の摺衣、映るふ浪も紫に、亂れそめにし白露。」

としらべ了りて下婢に向ひ、

須賀子 お為や。兄様はお目が覚めてゐないか、そつと見て来ておくれ。

お為 (耳の遠きこなし) はい。

と早合點して上手の襖を明け、

お為 旦那様、旦那様! (と呼ぶ)

須賀子 あれ、お起し申すんぢやないよ。お為お爲つてば、仕様が無いねえ。

と立つてお為を留める。

お為 お嬢様、それぢや何でムいますえ。

須賀子 お目が覚めてはゐないか見ておくれといったのだよ。もういゝの。

(三)

お為 まア、御免遊ばせ、お起し申すんだと思ひまして。では見て参りませう。

(三六)

須賀子 もういゝわ。兄様はびつくりしてあの通りお目覺だよ。

お為 耳が遠いもんですから濟みません。

須賀子 いゝから、では障子を明けとくれ。

お為 けい。

とお為書齋の障子を明ける。

須賀子の兄、柴山不二男(卅四五)病氣にて褥の上
に座し、括枕に肘を持たせつゝ懶氣に何か考へてゐる。

須賀子 (兄の傍へ行き) 兄様、御氣分は?

不二男 少し寝たから大分いゝ。

須賀子 びつくりなすつて?

不二男 いや、さうでも無い、お前の琴を聴いてゐた。

須賀子 まアよかつたこと。では葡萄酒でも召上れな。

と注いで出す。不二男飲む。

須賀子 けふはお天氣ですから、明けると氣がせいゝするでせう。

不二男 あゝ、(庭を見て) 朝靨が大分黄色になつたな。

須賀子 その代りあなたのお好きな萩が眞盛ですよ。お熱が無ければ様まで出て御覽にならないこと?

不二男 出て見ようか。

須賀子 さうなさいな。

須賀子 (お為を顧み) と立つて不二男に羽織をかけ、藤椅子を直す。

お為 お琴でございますか。はいゝ。

と立つ。

(三七)

須賀子 (不二男に向い) お寒くはなくッて?

不二男 いや暖かだ。と立ちて二足三足。

須賀子 おみ足がふらつくでせう。不二男 なに大丈夫。

と藤椅子にかけろ。須賀子は庭へ下り、

須賀子 紫苑がこんなになりましたわ。不二男 よく伸びたな、そのは何か。

須賀子 これ? ペコニヤよ、あの上川さんから頂いた。不二男 さうか、美しい花だな、

お爲座敷を片づけ庭へ下り、

お爲 お嬢様、比丘尼の花がたんどですから、旦那様の花瓶に挿してお上げなさいましな。

須賀子 何の花?

お爲 比丘尼の花ですよ。

須賀子 オホ、比丘尼の花だつて。ペコニヤよ。

お爲 エ、何でございます?

須賀子 ペーコーニヤ。

お爲 ビコニ……私には言へません。何でもよろしいでは無いませんか。

花瓶を持つて参りませう。(と引返す)

須賀子 オホ、。

不二男は寂しく微笑す。

お爲花瓶を持ち来り、水をかへて須賀子に出す。

須賀子花を選び取り取りて花瓶に挿し、縁に置きて不二男に見せ、

須賀子 御覧なさいな。ほんとに可愛い花! ガラスの花瓶には西洋花の方が

可うムいますわねえ。

不二男はつくづくと見ながら、

不二男 あゝ此の花を見ると、張家屯の戦後の光景を想ひ出すな。陸軍大學で同級にゐた横村が砲弾の破片に胸部を打たれて斃れてゐたが、其處が又あたりには珍しい青草の中で、全身血に染まり、右手に艸花を握んで仰向に天を睨んでゐるその青黒い貌が夕日に映つたところ、物凄いと氣高いとも、まるで神話の中にでもありさうな光景で、その握つた艸花がこのペコニヤによく似た花さ。

須賀子

まア！

不二男 後で髪の毛と一所にその花を封じて横村の宅へ送つてやつたが、大切に腊葉にして寫眞の裏に貼つたと言つて来た。

つくづくと追想の思入、須賀子も引込まれて涙を催してゐる。お爲はよくわからぬ介。

お爲 どうかなさいましたの——オヤお嬢様も！

須賀子 どうもしないの（お氣なっへ）あゝ此の花は棄てませう。兄様が又お考へになるといけないから。

と花を抜き取る。

不二男 何、いゝさ、今のなさア些細な話だ。まだ——どうして……………

お爲 あれまア惜しい事を。（向を見て）あゝ、上川さんですよ。

と茶の間へ立つ。

前幕の上川晋軍服にて下手より本舞臺にかゝり柴折戸の外より、

上川 やあ。

と勢よく聲をかけ、須賀子を見て、

上川 如何ですか、柴山君は？

須賀子（柴折戸をわけつゝ）有難うムいます。まあおはいり遊ばして。

上川 ちつとはいゝ方ですか。

須賀子 はいお蔭様で、今日は様へ出てをります。どうぞこちらへ。

と案内する。

上川 不二男を見て やあ柴山君、どうだね。御無沙汰をした。

と靴をぬぐ。

不二男 有難う、大きにいゝ。

と打つれ書齋に入る、須賀子は蒲團をすゝめつゝ、

須賀子 入らつしやいまし、どうも先夜は有難うございました。

上川 何、飛んだ事でした。

と何気なき挨拶、不二男に向ひ、

上川 時に先夜は君が来ないので、岡大將を始め皆が心配してゐたよ。まさか神経がどうといふ事もあるまいが、全く心配した。早く来るんだつたがあの晩は大將の所で遅くなるし、翌日からは本部の調査で

多忙を極めつい延引き。腦の具合はどうかね。ちつとは軽くなつたか。

不二男 いや軽くもならんが今日は大きにいゝ。

上川 さうか、併し君は神経家だから、自分で餘計重くするんでは無いかと思ふ。

不二男 僕が神経家なもんか、旅順の背面であれだけの惨状を見ながら無事に還つてきた位だ。無神経と謂つていゝ。

上川 それ、それ、その通りだ。いや皆が心配してをるといふのも畢竟その點で、君の先達の手紙、全體何だいあれは。機關砲を發明したのが幸だとか不幸だとか、本意だとか不本意だとか。え、勿論深い意味は無からうな。

不二男 いやある。熟考の結果を岡大將にはのめかしたのだ。柴山不二男が煩悶の聲だ。

上川 では申戯ではないのだな。

不二男 勿論。

上川(思入あつて) いや鳥渡その噂は前から聞いてはゐたが、まさかと思つた譯さ。ではこゝで其の理由を聞いて行かう。僕になら話してもよからう。

不二男 むゝ話さう。

上川 しかし場合によつたら論破して了ふぞ。

不二男 よろしい。

須賀子茶菓を上川にすゝめ、兄には服薬させ、兩人の氣色を覗ひて次の間へ立つ。

上川 だが病中で悪ければ、又今度でもいゝぞ。

不二男 何、構はん。

上川 では聞いて行かう。理由は？

不二男 理由といつてもいろいろの事に關係はあるが、つまり人道の爲めに見合せようといふんだ。僕の發明した機關砲は人類の持つべき兵器として殘酷過ぎる。戦争をする武器では無くて虐殺をする機械に屬するからだ。

上川 それだけか。

不二男 要點はそれだけだ。

上川 あんまり單純では無いか、元來武器は銳利を理想とするもので、威力の大なるを競つてゐるのが各國の現状だ。科學應用の今日、大仕掛の兵器の出来るのは當然ぢや無いか。君が武器を發明しつゝ其銳利を恐れるのは自家撞着で、戦争その物を否認すると同じになる。不二男 いやさうで無い。先づ戦争とは何物であるかといふ僕の根本の解釋を聞いてくれ。

上川 うむ。

不二男

かうだ。個人が是非利害を争ふ場合には個人以上の國家といふものがあつて裁判をするからいゝが、國家と國家との争になると、それ以上のものが無い。宗教が列國の主上權を保つてゐた中世期でも、國と國との争になると、あんまり力が無かつた。そこで兩國の争に、理が理で通らず、非が非で引込まず、乃至は是非判明しない場合になると、せん方なく一國の精力を盡して勝負をする。存分に戦つて勝てば勝つてよし、負ければ負けても悔いなのが戦争の慣で、此の顯象を少し超絶的に考へると、勿論正當防禦とが破邪磨懲とか種々の口實はあつても、結局戦争の目的は敵を破るにありといふよりは寧ろ戦つて鬱憤を晴らすにある。戦ふことそれ自身が目的なのだ。いや實際だ、古來の戦争を見たまへ、必ずしも成算を置いてかゝらない所謂時と場合、引かれぬ意氣地でやつてをる。敵の強弱や自分の利害を顧みないのが十の八九で、局外から見れば馬鹿々々しい事

(四六)

だが、やるだけやれば自然に済む。我輩が武器に或制限を設けたいといふのはこゝだ。既に戦争なるものが向う見ずの張合であることすれば

上川(遊リ) 待ちたまへ、君の一家言は勝手だが、では君は戦争を馬鹿々々

しいものと知識的に否認するんだね。

不二男 いや知識的にも感情的にも戦争を否認はしない、已むを得んものとして是認してをる、戦ふ事は人間固有の性質でもあり、又大きな葛藤は戦争より外に解決の道が無いと思つてをる。

上川

うむ、然らば?

不二男 然らば則ち、今日未來ともに、戦争は本來の意味通り一國の鬱結を散するだけの格闘にして欲しい。飛道具もよからう。無線電信もよからう。その他知識的方法もよからうが、何も大仕掛な機械作用を以て、恰も製粉工場で穀物を磨り潰す様に一度に大勢の人間を屠

(四七)

らすともいふぢやないか。

上川

こりや驚いた。全體君はいつの間になんか僻論家になつたのだ。君のいふ戦争は源平時代や十五六世紀の事だ。今日の戦争は是非も利害も互に知り悉した上、大にしては一國一人種の存亡、小にしても國運の消長を賭しての仕事だ。そんな道楽半分な事では無い、真剣だ。論より證據今日の戦争の勝敗は、單に將卒の勇氣や戦略の巧拙のみに由らず、國民の知識の程度、言ひ換へれば、科學應用の程度にまで由るではないか、地球の面積が狭くなつて、生存競争激烈の今日、戦争ほど真面目なものはない。

不二男

その真面目が僕の氣にくはんのだ。今日くつて君は今日の戦争を何と思ふ。戦ひの利那は成程真面目でもあらう、神聖でもあらうが、戦の動機を見たまへ。強者が弱者をいぢめて無理から起させる戦争なのだ。最近の例證は擧げるまでも無く比々皆然りで、動機が自分

勝手だから戦争の終結する時代がないのだ。那破翁やセシルロープの世界統一は夢の中の夢だ。かういふ非道な動機の下に我々軍人は、果しの無い戦争を商買にして、神聖のものと心得ねばならんとは、何といふ淺はかな事だらうぢやないか。

上川

アハハ、到頭トルストイにかぶれたね。日本はまだ露西亞では無いから、トルストイは早過ぎるせ。健全な學説の云つてをる通り、戦争は文明の腐敗を防ぐ殺菌劑だ。若しくは舊文明を破壊して新文明を建設する大工事だ。戦争の目的は一層大なる平和を齎すにあるんだ。すれば最も早く敵を破つて、最も早く平和に復するのが戦争最良の方法で、銳利なる兵器は戦争の終結を早からしむるといふ事はれ亦た一般の説ではないか。

不二男

うむ……………(と何々思索の思入)

上川(熱心に) 柴山、しつかりしてくれよ、戦術論でも數學でも、君は始終我

々より上であつたぢやないか。

(五〇)

不二男は沈思の面を上げ、

いや上川、今になると僕も君と同説であつた昔が戀しい。同じ袖をかけた陶器でも、火をあてること一つは黒くなり一つは青くなる。君と僕とは一所に學校を出て一所に軍人になり、又一所に旅順の背面を攻撃したが、君は益々活潑な軍人氣質を磨き、僕は幸か不幸か宗敵家の様になつて了つた。王家屯で上陸して、南山の守備隊になつた時は、前途に燃ゆるが如き功名心を抱いて、鹵獲の機關砲を分解しては連りに自分の發明を完成させようと、夜も寝ずに考案したものだ。間もなく歪頭山から劍山、太白山の激戦にも堪へて、太孤山の大突撃にも加つたが、本防禦の惨状はどうだ。そりや僕だつて帝國の軍人だ、血を見て蟲を起すやうな弱ミンでは無い。親が斃れうと友人が死なうと、屍を踏み越して突撃もした。瘦せたこの腕にも

敵兵の血を浴びた事十度や二十度では無いが、今思つてもぞつとす
る、八月二十三日の夜、五家房から盤龍山東砲臺の方へ向ふ例の地
隙だ。あの中を僕の中隊が砲車を引きながら進んだが、地獄の墜道
と誰れかが名をつけたのは名句だ、其日に第七第八兩聯隊が敵の機
關砲で散々にやられた跡だから、地隙の中は死傷者で一ぱいだらう。
右に避けうにも左に避けうにも右左皆死傷者だ。仕方が無いから敵
せつと聲をかけながら、半分は生きてゐる同胞の軀を靴で踏み砲車
の轆にかけて前進した。するところ闇の中で殺してくれ」と重傷
者の叫ぶ聲。——戦地では僕も悪魔か夜叉の様な心ではあつたが、
此の聲だけは實にこたへた。上川、許してくれ、僕は戦争が嫌にな
つたのだ。旅順背面の難戦はこの方面もこの通りで、プリヤルモン
トの築城法も築城法だが、我が軍に最も残酷な損害を與へたのは敵
の機關砲だ。僕は地隙内のサブライムな惨状を見て、敵味方といふ

(五二)

心から解脱して人道問題を意識したんだ。機関砲は實にひどい。——

(五二)

と痛切なる思入。

上川 ふむ、それ程ひどいと感じた機関砲を、君は其後も戦地で研究して、

凱旋の後にどうく大成させたのはどういふ譯か。

不二男 そりや僕にも解らん。數年間研究した恐らくは情勢だらう。あゝあの時止めて了へば今の苦みは無かつたものだ。

上川 で、君の機関砲の威力は？

不二男 在來のに數倍してをるとおもふ。一分間に二千發發射が出來て一人で持歩かれる。

上川 えつ二千發！一人で操縦！では獨乙の自働機関銃と同等だな。

不二男 あれ以上だ。

上川 やつ、大したものだぞ。さう聞いては愈々打捨てゝおかれん。柴山、

帝國の爲めだ是非發表しろ。

不二男 人道の爲めに發表は出來ん。

上川 (せき込みつゝ) 貴様は帝國の軍人でありながら、ユニテリヤンの様な事を眞面目にいふのか。

と聲が荒くなる。次の間の須賀子水菓子を持ち障子を明けかけて立留まり、心配のこなし。

不二男 公けにしないのはユニテリヤンでは無い。日本武士道の精神だ。

上川 そんな氣の弱い武士道があつてたまるものか。

不二男 殺伐は武士道の本意でない。

上川 何、殺伐？

思はず高聲に答る。

須賀子は氣が氣ならず、そつと庭へ下りて勝手へ向ひ、お爲を招く。

(五三)

お島 お嬢様、何でもいますえ。

須賀子 あれ！(と制して小聲に) 兄様が上川さんと大層議論をしていらつしやるんだがどうしようね。

お島(聞えぬこなし) はいお薬ですか。私がつて参りませう。

須賀子 あらお薬ぢやないの。二人で言ひあつていらつしやるからだよ。

お島 はいくさうでございましたか。では洋食をさういつて参りませう、

お二人前ですね。お酒は何に致しませう。

須賀子 仕様が無いわねえ、耳をお貸し。

と囁ぐ。

お島(やうく合點し) あゝわかりましたく。では私が行つてお留め申しませう。

須賀子 さうしておくれ。あの、まだ喧嘩といふでもないんだから、よくな。

お島 はいく。

と書齋に立ち入り、

お島 旦那様まアお、お静かに。ごんな譯か存じませんが、お客様もどうぞ、どうぞね。

と二人の中にはいる。

不二男 何を言ふんだ、どうもしないぞ。

お島 でもムいませうが、御病氣に障るといけませんから、(上川に向ひ) ね、

貴方もどうぞ、お腹も立ちませうが今日の處は。

不二男 えい、貴様の知つた事でない、彼方へ行け。

お島 でもあの……

不二男 行かんか、馬鹿ッ。

お島叱られて次へ行く。

上川(一寸思入あつて) では結果から論じて見よう。君がその機關砲を技術審査部に提出したとする。審査の結果は無論優等だ。軍事の改良は尤も

機敏な今日だから、教育總監部でも參謀本部でも直ちに採用と決定する。全國の師團にその機關砲を備へる事になる。露西亞の機關砲でさへ一門で一個中隊に當つたものだ。然るに君のは攻撃用にもなるんだから、其機關砲を用ふることになれば、中隊の兵員を僅かに三分の一以下に減することが出来る。百萬の兵員を三十萬に減じてい、譯だ。それ見ろ、残る七十萬人は召集されずに業務を執れば國家經濟の大利益は言ふに及ばず、戰鬪になつても損害率は非常に減する。輸送も早くなれば供給も十分になる。軍隊の利益は三倍や四倍や五倍では無い。一言すればその機關砲は日本帝國の富強の爲めにどれだけの大功德を與へるか側り知れん位だ。殺人器械などは以ての外で、寧ろ澤山の人を助ける救命機械となる譯だ。迂濶な事を言へ。器械が精良になつたら戰鬥員を減することが出来ると思つてゐるのか、それこそ大間違だぞ。相手が少し強國であつ

(五六)

不二男

て見ろ、三十萬でいゝところは五十萬出さんければならん。すると敵も兵員を増加する。敵が増員するからこつちも亦七十萬にする。敵が又増員する、こつちも増員する。つまり國力と輸送力のありつたけ出して戦ふのは避くべからざる勢だ。兵器がいくら精良になつたつて、兵員は少しも減することは出来ん。互の損害が増して愈々戰爭が慘酷になるばかりだ。

上川 勿論、敵が増員すればこつちも増員するは時と場合だ。敵兵の損害を心配して戰爭する奴があるか。

不二男 人道を外れた戰爭は野蠻人の仕事だ。

上川 馬鹿を言へ、入らざる平和會議といふものまであつて、ダム／＼彈丸だとか、有毒瓦斯だとか、氣のつくだけの事には制限の出来てゐる今日だ。それ以上の心配は寧ろ滑稽だぞ。

不二男 いや、おれの機關砲の慘酷加減はダムダム彈丸の比で無い。だから

(五七)

日本の陸軍省に提出する前に平和會議へでも持出すべきかと思ふ。

上川

大馬鹿、大氣狂！折角發明した國の實を外國人に見せる奴があるか。

愈々激論になる。この間須賀子は、屢々自身に行かんとして行きかね悶ゆる弁。

不二男

貴様こそ戦争狂だ。少し眼界を廣くしろ。

上川

偏狹は貴様の事だ。よし、何でもいゝ我輩が發表させるからさう思へ。

不二男

貴様なぞに説破しられるものか。

上川

ではどうあつても發表しないか。

不二男

しない。

上川

おれがこれ程にすゝめても？

不二男

勿論！

上川

貴様の爲めにこれ程己が頼んでもか。

不二男

よせ、交際や私縁で決する問題では無い。

上川

何だこ！(急ぎ込む)

不二男(冷然)

貴様と須賀子の縁がある爲めに我輩の持説は枉げないといふのだ。

上川

む、(と口惜しき思入) よくもおれを侮辱したな。貴様の妹に未練があつて、そんな恥辱でもこらへる上川晋と思ふか。

須賀子

あらどうしよう。お爲や、何でもいゝから早く止めておくれ。

お爲

でも行くぞ叱られます。

須賀子

いゝえ大變な事になりさうだから、よつ早く。

お爲

ではいつて見ませう。

須賀子

早く！早く！

お爲の行かんとする時、

不二男(高聲に) これが恥辱ならどうなとしろ。

上川 うむ帝國の利益を圖らん腰拔にもう用は無ない。縁談もこれ限りだ。

不二男 お、手前の様な馬鹿者に誰が妹をくれるものか。

上川 貴様とも絶交だぞ。
と席を蹴つて出で行く。
お為はうろく。

須賀子 お、お腹立でもムいませうが、兄は何分、何分病氣で、神経が昂ぶつてをりますから、どうぞ、ね、どうぞ御勘辨遊ばして。

上川 いね、もう(と鼻入あつて)お目にかゝりません。

と突きはなす。須賀子柴折戸に取りついてワツと泣く。

三 東砲台

舞臺一面薄暗き青電燈の光。

正面に某山東砲臺、その左右同じく西砲臺及S砲臺、向うに上臺及F高地を示す審判。一木の遮扉も無きだらく上りの禿山にて、中腹に歩兵堡壘、其前に小丘、よきところ斜に鐵條網を走らす。砲聲遠く聞えて、上記の各砲臺より連りに砲火の白煙を吐く。

やゝありて揚幕より一隊の工兵、歩兵一分隊に掩護せられて本舞臺に突進し、鐵條網にからむ。電流に打たれて叫び倒るゝもあり。敵兵壘内にて一斉射撃を爲す。工兵屈せず大鉄を以て鐵線を切り、或は鎚もて抗を打

ち倒す。彈丸雨下。一隊盡く斃さる。
續いて一隊の工兵無二無三に鐵條網を破り、鉄の尖に
軍帽を懸けて高く振る、此の合圖にて揚幕より歩兵一
隊呐喊し來りて小丘を占領す。

中隊長 伏せ！

と伏して苦戦になり、中隊長斃さる。小隊長代りて指
揮す。亦倒さる。分隊長代り、機を見て、

分隊長 前へ！突貫！

一氣に突込み行く。機關砲の音愈々激しく、一隊全滅
す。
揚幕より二番手の一隊、聯隊旗を押立て、突進し、激
戦の末、再び小丘を占領す。

機關砲の彈丸急霰の如く、聯隊旗の旗竿ムツと折る。
旗手銃身に旗をつけて高く捧ぐる途端に、一九飛び來
りて壯烈なる戦死を遂ぐ。
砲聲銃聲激烈を極め、將卒相次いで斃れ一隊遂に丘上
に全滅す。砲聲歇む。奥にて敵兵呐喊の聲。
上等兵荒島某この聲を聞くや、數ヶ處の重傷を負ひな
がら起き直り、あたりを見まはし、よろめき、斃
れたる聯隊旗手の方に匍ひ寄る。生氣盡きておち入ら
んとすること屢々。敵兵の聲に氣を勵まして、こゝ旗
手の側にたどりつき、旗を取らんとするに、旗手強く
旗竿を握りて放さず。せん方なく紐を切り離す。敵兵
呐喊の聲近く起る。荒島、聯隊旗を持ちて走らんとす
れども足きかず。思入あつて聯隊旗を頭に巻き、身を

輾がして急斜面の下に落つ。この時大尉上川(前場の花道より駆け来り、聯隊旗をさがす心にて斜面を駆け昇らんとす。

(六四)

荒島 大尉殿！(息絶々に呼ぶ)

上川 驚きてふり向く。

荒島 頸の聯隊旗を指し示す。上川見て、

上川 おツ、聯隊旗か。有難い！(と受取りて押返す)

上川 荒島！よくやつたぞ。

荒島 ははや詞利かず、手まねにて早く逃げよと示す。

上川 は戦友を置いて行きかぬる介、と決心して、聯隊旗を腹に巻きつけ荒島を肩にかける。とたんに敵兵一人銃剣にて上川に突いてかゝる。上川足をあげ蹴倒して一散に下手へ走せ入る。

電燈少し明るくなる。

敵堡壘の中より柴山不二男自身發明せる機關砲を携へ、悠々と歩み出で、小丘の上に取りて一々屍體を檢し、命中の模様を見て満足の微笑、最後に一人の將校を抱き起す。この將校手にベコニヤの花を握りてあり。柴山頭を見てびつくり、

と膝と地に座す。電燈消ゆ。

不二男 やッ横村！

【三】 書齋

ダアク、チエンジンにてもこの柴山不二男の書齋になり、

(六五)

不二男 梅の中になされてあるを、須賀子起してゐる
體にて電燈明るくなる。

(六六)

須賀子 兄さま、兄さま、ごうかなすつて？ 兄さま！

不二男 うーム。

と眼を開きて須賀子を見、梅の上につき直り、

不二男 あゝ夢か。

と思入。

須賀子 夢を御覽なすつたの？ 大變うなされて、御氣分は悪くはありませんか。

ごてらを懸けなごする。

不二男 (胸に手を置きながら) まだ動悸がしてをる。ひどい夢を見たものだ。

首を宛れて考へる。

須賀子 そんな夢？

不二男 戦争の夢だ。

須賀子 それなら折々ちやありませんか。

不二男 折々見るが、今のは實にひどい。残酷極まる。……いや、あれが、本當かも知れん。

と考へ込む。

須賀子 まア話して御覽なさいな。悪い夢は早く言つて了ふもんだつてますよ。

不二男 (息を吸ひかつて) 須賀さん、上川の事は断念してくれよ。

須賀子 えッ？

不二男 さあ、お前には實に氣の毒だが、已むを得ん。ごうか断念してくれ。おれと上川とはごうしても意見が合はん。

須賀子はうつむきて泣く。

不二男 断念してくれ、……よ、……よ。

(六七)

須賀子は泣くばかり。
不二男見やりて思入。

不二男

まア聞いてくれ、今の夢は斯うだ。何處とも明瞭せんが、何でも敵の砲臺を日本軍が攻撃してをる、例の工兵が鐵條網を破つたり、歩兵が度々突撃したり、なか／＼激戦で、さう／＼日本軍が聯隊旗を押立て、前の丘を占領した。すると砲臺の歩兵陣地から機關砲でもつてどし／＼とやる。此機關砲の猛烈なことを、忽ち日本軍を全滅させて了つたのだ。それだけならまだいゝが、己が、此の柴山不二男が、あらう事か敵の砲臺の中に居て、今度發明した機關砲を使つて日本軍を打つたのさ。

不二男

須賀子だん／＼顔を上げて兄の物語を聴く。
中隊が丘の上で全滅したから、あとへ己が行つて戦死者の傷口を檢めたが、機關砲の慘酷なことを實に驚くばかりだ。一人の將校が花を

握つて死んでゐるから起して顔を見ると、先刻話をした横村だ。アツと言つて倒れたと思ふとお前が呼ぶので目が覺めた。——須賀さん、夢は五臓の疲と昔からいふが、己は今の夢には非常な意味がある様に思ふ。それアごんな事があつたつて、己が敵の中にはいて我が同胞を打つ様な馬鹿な事は無い。無いがこゝを考へて見てくれ。同胞だといへば敵國の人間も皆同胞だし、他人だといへば日本人同志も皆他人だ。己が機關砲で親友の横村を始め日本人を慘殺した罪の深い今の夢は、取りも直さずそんな怖ろしい機關砲を發明した罪惡の誠ではあるまいか。え、須賀さん、お前はさう思つてくれる。はい、私共にはよく解りませんが、まアさう言へば言へない事も無いかと思ひますわ。ですけれど……

須賀子

不二男

さあ、それだて、先刻上川が機關砲を發表しろと盛んに論じた。己が背かんのので、さう／＼あんな事になつたが、絶交は無理は無い。

己がたゞの學者ならいゝが、軍人でありながら軍器を發明して發表しないのだから、上川には我慢が出来ん筈だ。須賀さん、こらへてくれ、諦めてくれ、意志は任せ難い。

（思入あつて）上川さんももう會はないと仰つてましたし……かうなつては仕様が無いではありませんか。諦めるより外はありませんわ。

さ衷心失望の思入。

不二男も察して暫く無言。

須賀子 ですけど……

不二男 ふむ何だ。

須賀子 いえ愚痴はよしませう。

不二男 話して御覽、何だ。

須賀子 あの、あの兄様も病中ですし、あれ程に議論しないでも、快くなつてからの事になすつて下さると、もつと譯もわかつたものでは無い

かと、つい……

不二男 いや〜全快すれば益々意志が固くなるばかりだ。この道衝突は免れん。

須賀子 それに兄様も砲工學校にいらした頃からあの發明にかゝつて、河村少將の縁談も辭り、全五年夜の日も寝ずに勉強なすつて、とうとう機關砲が出来たと思ふと、此の通り病氣にはおなんなさる。お友達も無くなる。本當に心細くてなりませんわ。

不二男 それは機關砲の様なものに着手したのが悪いのだ。卑しい功名の一念に驅られた報いと思へばそれまでだが、思はん氣の毒な事になつたのは須賀さんだ。こればかりは宥め様が無い。勘忍して下さい。よ、よ。

須賀子 泣きながらやう〜うなづく。

不二男 それには又將來の事もあるて、いよく機關砲を發表しないと、

本部の方も面白くあるまいし、一つはこの病氣だ。だから己は休職でも願つて何か心に満足した仕事を爲たいと思ふが……併し須賀さんには尙ほ以て氣の毒だなア。……

と深く考へに沈む。

須賀子は兄の打萎れたる様子を見やりて、氣をかへ。

須賀子 いえ、私はもう何ともありやしないわ、何んな事でもお手傳はしますから、早く快くなつて下さいな。

不二男 では聞きわけてくれたのだね。

須賀子 はい少い時からお父様にもお母様にも別れて、兄様ばかりを便にしてゐた私ですもの。

不二男 運命だな。

須賀子 約束だわ。

不二男 (堪へられて、妹の手を取り) 須賀さん！

須賀子 兄様！

と取り附いて顔見合せ、愁の模様。

[幕]

大詰

私立廢病院

一面の芝原上手の奥に、小き木造の洋館、下手に柵を隔て、高き近衛の射菜、花道のつけ際、木門に「私立廢病院」の札を懸く。よき所に腰掛一脚。

幕明くと、柴山不二男、ズボン視衣にて、符を手にし、廢兵三四人に手傳はせつゝ、庭の掃除をしてゐる。

不二男

大分奇麗になつたぞ。永見、少し水を撒いてくれ。

永見如露にて水を撒く。廢兵二人が、りにて塵取に埃を掃き入れ、上手へ持ち行きて棄てる。

不二男

今日はこの廢病院の一周年で、午後は來賓もあり餘興もあるんだから、早く掃除を了つておかう。

とそこらを掃く。

永見

あとは私共が致しますから、院長はおはいり下さい。

不二男

いや、何事もお前達と一所にするのが、此院の主義だ、水澤、貴様はもう休め、又脚が痛み出すといけない。

水澤

まだ大丈夫であります。もう少し手傳はせて頂きます。

須賀子看護婦の服装にて見事なる櫛梯を盛りたる籠を携へて出づ。

須賀子

兄様も皆様もお精が出ますこと。一寸お煙草になさいませんか。籠を示し、あの是れは、今入佐さんのお嬢様に頂きましたから持つて参りました。

不二男

さうか。丁度片づいたから休まうか。

皆々腰掛に並ぶ。須賀子櫛を廢兵に分けてやり、

須賀子

ナイフもありますよ、——水澤さん待つていらつしやい。私が剃いて

上げませう。

(七六)

と柿をむき隻手の廢兵にやる。

水澤 有難うございます、済みません。

と頂いてたべる。

不二男 入佐さんはもう入らしたのか。

須賀子 はい、餘興は午後ですけれど、裝飾があるからつてもう入らつしや
いしましたわ。あの、下手な新曲を聴いてもらうんだから、裝飾のお
手傳でもしませうつて、襟がけで働いていらつしやいますのよ。本
當にさつぱりしたい、方ねえ。

不二男 ふむ。

永見 大きに御馳走でムいました。では東側の方をやつて來ませう。(と立つ)
不二男 ちやアさうしてくれ、己もすぐ行く。

廢兵皆々上手へはいる

須賀子 早いもんですねえ、この廢病院が立つてから滿一年になりますかね
え。

不二男 實に早いな。去年の十月に休職を願つて此廢病院を設立したが、己
もお蔭で身體は丈夫になる、廢兵もお前の世話が届いて實の親子兄
弟の様に親しくなつて大きに嬉しい。須賀さん、もうこゝには心配
は無いから、どうだね、どこかへ嫁いては。あの山岡さんから度々
言つて來る軍醫正の處などは至極いと思ふが。

須賀子 兄さまのそんなに思つて下さるのは有難うございますけれど、私は
どこへも嫁く氣はありませんわ。

不二男 お前のさう一途に思ひつめるのも無理はない。そりや上川とは去年
あんな工合で不通になつたが、今となつて考へれば、己の思想は思
想として、妹には關係無い事だから、どうかして舊の様に實は思
はんでも無いが、第一上川の折れて來さうな譯も無し………

(七七)

須賀子 いえ、上川さんのことではありません、もう、何處へも嫁く

不二男 氣はありませんの。一旦思ひ切つたんですから。

須賀子 さういはれると尙更だが、しかしかうやつてゐても話相手一人ある

不二男 では無し、こんな處に獨身で暮らすのは寂しからう。

須賀子 そりやチツとは寂しうムいますわ。ですからね、私はあのお嫁に參

りますよりは仲のいゝ姉様が欲しいムいますの。兄様こそ早くお貰

ひなさいな。

不二男 己は急がぬ。

須賀子 でもそうは參りませんよ。まああの入佐さんの様な方だごんなに

いゝでせう。御容貌はよし。何でもあんなにお出来になつて、ちつ

とも高慢らしくない。本當にいゝ人ですわ。

不二男 それもさうだらうが、お前のこんな所にくすぶつて了ふのを己は見

るに忍びんだ。

須賀子 兄様だつて立派に出世の出来る身で、わざ／＼かうして入らつしや

るぢやありませんか。

不二男 それは己れの意志だ。

須賀子 殿方の意志も女の操も同じですわ。

不二男 うむ。

須賀子 思入。須賀子上手を見て、

須賀子 あら入佐さんが。

入佐秋子、(廿三四、東髪紫被布、さつぱりとしたる推)

(へ)上手より出で、二人に會釋。

秋子 今日はお芽出度ございます。

不二男 よくお出下さいました。

須賀子 先刻は又おみやげを有難うございます。もう皆して頂きましたよ。

秋子 何でムいますかオホ、。あの、娯樂室の裝飾が出来ましたから、

須賀子 一寸御覽下さいました。有難うございました。では拜見させて頂きませう。兄様も入らつしやいな。

不二男 己れは東側の方を廻つて行くから、先へ行つてくれ。

秋子 では御免遊ばせ。失禮。

秋子、須賀子伴ひて上手へ入る。

不二男 あごを見送り、

不二男 妹もひごくやつれたな。こんな事をさせておくもんだから、あゝ並んで歩く姿は、本當の看護婦としか見えん。可愛相に。

と思入。

小使出づ。

小使 院長、岡大將がお見えになりました。只今こちらへお越であります。

不二男 何、大將閣下が？そりや大變だ(時計を見て)まだ十時だが、どうして早くお見えになつたか知らん。

小使 何でも柴山院長に話があるから、庭なら庭の方がいと仰つてであります。

不二男 では彼方へ行つてな。妹に上衣と帽を持って來さしてくれ。

小使 畏りました。

小使去る。

よき頃に大將岡喬輔(略服)須賀子の案内にて出で来る。

須賀子兄に上衣を着せ、不二男帽子、剣など着けて立禮

不二男 誠に御無沙汰を致しました。今日は態々。名譽の至りであります。

岡 暫くちやつたな。達者か。

不二男 お蔭で犬きに健康になりました。

岡 廢兵は世話ちやらう。

不二男 はい、手は足りませんが、妹がよく世話をしてくれまますので、皆満足してをります。

同 さうか。

小使茶を持ち来る。

須賀子大將に茶を出し。

須賀子(兄に) ではあちらへ失禮しますから、御用の時にはお呼びなすつて。

(向に向ひ) 閣下、失禮致します。

上手へ去る。

同 令妹は何歳ぢやつたかな。

不二男 廿二歳になります。

同 ふむ。感心な。——イヤ今日は午後一時からといふ案内ぢやつたが、一寸話があつて早く来た。

不二男 それは恐縮致しました。お話とは何でありますか。

同 外では無い。お前上川と絶交しとるさうぢやが、もとの通りに交際したらどうか。わしが仲裁ぢや、さうしてくれんか。機關砲の議論で衝突したけの事、謂はゞ君子の争だ。いつまで根葉にもつにも及ぶまい。

不二男 其の事でありませうか。仰せの通り他に何んにも面白からん事があつたでは無し、莫逆の友人でありますから、上川さへ承知なら私ばかりはかまひませんが、其後私は意志の通りさうく、機關砲は發表せず、斯うやつて廢病院を設立して引込んでをるのでありますから、上川の方から説を和げて来んければ調和の道が無いと存じます。

同 そりや其の通りぢやが、上川も今更變説は出来んから、當分わしが預つて置かう。機關砲の意見がさう違はうと、今日の廢兵院長と砲兵少佐と交際が出来ん事はあるまい。まわさうぢやないか。

不二男 成程、伺へばその通りであります。肝心の上川がそんな事では屑

阿

とすまいと存じますが。
それだ。それには須賀子さんの事もあるから、わしも種々考へ
たのぢやが、けふ急いで此話に來たのは、上川が二三日中に南亞米
利加の戦争に出かけるからでな。

不二男

阿

エツ、南亞米利加の戦争へ。では智利かアルゼンチンでありますな。
うむ、まだ世間には詳しくわかるまいが、今度の智利とアルゼンチ
ンとの戦争ぢや。智利の方では、かねて秘密にしておいた空中飛行
器を盛んに出して、連發銃で上からどんくやる。流石のアルゼン
チンも苦戦ぢやさうな。陸軍では非常に注意して居る。

不二男

阿

ではその視察を上川が命せられたのでありますな。
いや志願ぢや、アルゼンチンの義勇軍に投じたいと言ふのだ。それ
も斯ういふ事情がある。あの上川がお前と絶交して、須賀子さんと
約束も破談になつてから、もうまるで失望の人間になつて了つたの

不二男

ぢや、譯も無い事に下級士官を叱り飛ばす、上官に衝突する、參謀
次長であらうが誰れであらうが、遠慮なく議論をする。新智識は十
分にあつて、砲の事には精通してをるから誰れも叶はん。併しさう
一々ツツ懸られては上長官の威厳も保てず、仕事も運ばんから論し
てやると、面白くないと云つて自殺でもしさうな様子でな。師團へ
追ひ出すのも惜いし、參謀本部の持て餘し者ぢやわい。アハ、處
へ今度の戦争だから、當人に行つて來んかといふと行くといふ。上
川が行けば屹度やつて來るには違ひないが。唯の視察は望まん、ア
ルゼンチンの義勇軍にはいらうなごゝ自棄になつてをるから、折角
行きても無事に歸るかどうかわからん。困つたものぢやて。
なせ又さう自棄になつたのでありませう。
それはお前より外に察する者は無い筈ぢや。
えッ。

岡 お前と絶交してからの事ぢやから。

不二男(一寸思入) そこでその智利の飛行器の成績は餘程よいのでありますな。

岡 なかくよいと見える、寫真が来てをる。(價より飛行器の寫真を取出し) えらいものを發明したものだ。

不二男(寫真を受取り見て) 成程、大層簡單に出来てをりますな。

岡 教育總監部の鑑定では、無線電氣で運轉してをるらしい。これに對する兵器は無い。極精良な機關砲でも無くてはといふ評論だ。

不二男 成程。

岡 かう競争が激しくなると、武器の進歩は科學の進歩に少しも後れん事になる。

不二男 いや私もラヂウムを應用しようかと思つた位で。

岡 何しろ機運ぢやな。

不二男 これが世界の大大勢とすれば、怖ろしい慘酷な傾向でありますな。

岡 その代り赤十字社とか、平和會議とか、又この廢兵院とか、昔の戦争には夢にも無かつた博愛な事業も出来たのぢや。

不二男 いかにも!

と深き思入あつて獨語。

不二男 所詮世の中は分化で、善惡功罪、積極と消極と相待つて進歩するものと見える。……

岡 いやそこで上川の話ぢやが、あの狂つた調子を直すには、須賀子さんの縁談からもとくにするが近道ぢやと思ふが、どうぢやらう。

不二男 はい、それはさうかも知れませんが。

岡 さア縁談だけなら、わしが親になつて上げてもよい事ぢやが、お前と議論の始末がな。それに肝心須賀子さんの心はどうか知らん。

不二男 あれは他へ嫁く氣は無いと申します。

岡 さうか。では柴山、もうお前の考一つでこゝが一度にまごまるのだ

が。

不二男 不二男しばらく考ふることよろしく、と、決然と、大將閣下、機關砲を發表致します。

岡無言のまゝ、點頭。

不二男 發表致します。

岡 機關砲を發表してくれるか。

不二男 はい、機運には抵抗されません。さういふ飛行器まで出来て見れば、あの位の機關砲は早晩現はれる時代であります。天が私の手を借りて發明させただけの事、天意には逆らひますまい。上川といひ妹といひこれも天縁でありませうから、一刻も早く結んでやりたいと思ひます。

岡 うむ、よく決心してくれた。く。では善は急げちや、上川を呼びにやらう。

不二男 小使を呼ぶ。小使出づ。

岡 應接室に上川少佐が待つてをるから、呼んで来い。

小使 畏りました。

不二男 序に須賀子も呼んでくれ。

小使 はい。

小使去る。

岡 今日は大手柄をした。こんな満足な事は無い。

不二男 いろく、と御配慮を頂きまして、私も氣が晴々致しました。

岡 機關砲の雛形はどうした。

不二男 まだ保存してムいます。御覽に供しませうか。

岡 見て行かうか。

上川 晋小使に導かれ少し後れて須賀子上手より出づ。

上川、岡大將に敬禮。

上川 早速ちやが、柴山と仲直りをしてくれ。機関砲も公けにする

上川 えッ、機関砲を、お、公に。

須賀子も驚きの介。

岡 さうだ。

上川(柴山に向ひ) 實際か。

不二男 いかにも。理由あつて機関砲はいよく公にする。昨年からの僕の

頑固は免してくれたまへ。

上川 さういはれると僕も面目が無い。あの時の無禮は免してくれたまへ。

と兩人熱心に握手する。

須賀子は感に堪へかねて密かに涙を拭ふ。

アハ、、、流石親友は格別だ。まアこれで安心した。(須賀子を見て) お、須賀さんお聞きの通りちや、萬事、な。

須賀子 あ、有難うございます。

岡 では機関砲から見せて貰はうか。

不二男 承知致しました。

不二男上手へ入る。

岡 柴山が機関砲を見せるさうちやが、序に射撃は出来まいか。

上川 隣が近衛の射架でありますから、あれに向つて射てば、一寸届ける

だけでようムいませう。

岡 さうしてくれ、わしの名前で。

上川 ポケットより紙を出し萬年筆にて届書を認む。

岡調印す。

上川 小使、急いで之れを交番へ持つて行つてくれ。

小使 長りました。(去る)

不二男機関砲と銃弾とを携へて出づ。

上川 それか、成程輕便なものだ。

不二男(彌平) 是れであります。一寸運轉して見ませう。——發射
が出来ると一番だが。

上川 今届けたから大丈夫だ。

不二男 さうか、それは好都合だ。では的を拵へよう。

須賀子 私が何かさがして参りませう。そんなのがようムいますか。

不二男 丈夫な戸を二枚も持つてくればい。

須賀子 はい、そしてあの廢兵にも見せてやりませう。見たがつてますから。
不二男 うむ、よからう。

須賀子 上手へ入る。

折から揚幕の内にて騒がしき物音。序幕の倉部右源太頼より
り血を流しながら大洋刀を打ち振り熱血團の悪書生四人(根
棒仕込杖を持つ)に追はれて駆け來り、花道にて一寸止まり、

倉部 待伏しやがつたな、卑怯者め!

在原 手前こそ裏切りだ。

齋東 犬め!

落點 學探め!

逸見 やつちまへ。

と前後より打ちかゝる。激しき格闘になり、倉部本
舞臺に追はれ來る。

上川 (裏を見ながら) 畜生の喧嘩だ、……ヤッ倉部!

と飛び出で、吐嗟に在原の棍棒を奪ひて齋東と在
原とを打ち据ゑる。倉部は逸見を傷つく。在原、逸
見、落點一散に逃げて行く。上川は齋東を縛し、

上川 倉部君、何事だ。

倉部 上川さんでしたか。有難うムいます。畜生、待伏しやがつて。

岡 (倉部を見) 右源太、こゝへはいれ

倉部 (岡を見て) あッ伯父さん!

と額の傷をかくす。

岡 何のさまだ。来て話せ、相手は誰れた。

倉部 はい、皆兵學校の生徒です。あの時からして熱血團を脱會すると、私が何度いつても聞いてくれませんか、絶交書を送つてやりましたら、裏切だ、犬だつて、待伏せして襲撃したんです。今日の喧嘩は正當防禦です。

岡 たしかに、さうか。

倉部 嘘は言ひません、この齊東を糺問して頂けば分ります。

須賀子、秋子、廢兵大勢出づ。

不二男 (須賀子に) その怪我してをる書生を纏帯してやんなさい。

須賀子纏帯を出して齊東に手當をなし、小使をして

連れ行かしむ。

岡 (思入あつて) いや上川少佐、お前には毎度厄介でお氣の毒ぢやが、この岡が折入つてお願がある、聴いてくれんか。何、外でも無い、その倉部ぢやが、何とお前の馬卒にして戦地へ連れていつてくれんか。

上川 えつ、何と仰います。

岡 何さ、わしの甥でも容赦はいらん。随分やかましく叩きつけてな。心身を練磨してやつて下さい。こゝに置いてもあの通りで悪書生の仲間をぬける譯にいかん様子ぢや。どんな危険でも困難でも冒させ、南亞米利加で人間にしてやつてくれ。どうぢやらう。

上川 (思入) わかりました、お察し申します。倉部君さへ承知ならば及ばずながらお世話を致して見ませう。

岡 それは忝い。右源太、わしの命令ぢや、上川さんに随つて南亞米利加へ行つて来い。

倉部 あの、南亞米利加へ、何しにですか。

上川 少佐が亞ルゼンチン共和國の義勇軍に従軍されるから、貴様を馬卒にして連れていつてもらおうのだ。

倉部 僕が馬卒になるんですか、上川さんの、馬卒に。

同 さうぢや、一苦勞して人間になつて来い。今から上川少佐が貴様の主人だ。何事も命令に背いてはならんぞ。

倉部 (しぶくじ) はい。(承命する)

同 では上川少佐、願ひますぞ。

上川 不肖ながら慥かにお預り致しました。

同 (不二男に向ひ) 用意はごうぢやな。

不二男 (射撃の的を見て) すつかり出来ました。では發射しませう。

不二男 此の機關砲には、かく螺旋狀に彈子を込める。引金を引くと螺旋が

廻轉しつゝ連發する。射角は制限無し、筒先は左手を以て運轉し、

右手を以て彈込を行ふ。一銃の彈丸は一百發、この發射時間が二秒。

彈込の時間が一秒乃至二秒として、一分間の發射總數一千五百乃至

二千。銃身は或秘密の液體を以て絶えず冷して行く。

と發射の姿勢になり、自身に號令、

不二男 (號令) 狙へ！三百メートル、打て！

彈丸命中して標的一面無数の孔となる。

一同喝采す。

同 成程猛烈だな。

上川 柴山君、有効射距離は？

不二男 二千メートル。

上川 十分だな、重量は？

不二男 二十一ポンド。

上川 そんなものか。小銃の僅か二倍だな。銃口は？

(九八)

不二男 六ミリ。

上川 小銃の通りだ。併し發射は百發が單位かね。

不二男 いや彈鏈は百發だが、熟練によつては自由に中止も出来る。又連續射速も随意に増減が出来る。やつて見よう。

不二男 (銃令) 狙へ！徐かに打ちかゝれい 打て！

不二男 (銃令) 止まれ！

上川 ふむ、見たところ、技術の講習もさ程むつかしくなさうだが。

不二男 何でも無い事だ、誰にでも出来る。君一つやつて見たまへ。かうだと傳授する、上川直ちに了解し。

上川 ちや、號令をかけてくれ給へ。

不二男 (銃令) 用意！狙へ！撃て

上川發射する、彈丸命中し、標的落ちる。

一同喝采。

上川 成程、小氣味がい。

不二男 右源太、今の標的を持つて来い。

倉部 はい。

と走りて標的を取りに行く。

「もう一度戦争に出て見たい様だなア」「斯ういふ砲が

あれば、已たちも廢兵にならんでもよかつた。」など

口々にいふ。

倉部標的をかつぎ來り、

倉部 この通り、メチャクです。彈丸は土の中へ一尺もはいつて、こん

(九九)

なになつてゐます。

と廢彈を示す。

一同驚嘆の棄ゼリフよろしく、

上川 (思入あつて) これを南亞米利加へ持つて行つて實地に試みたいがどうだらう。

不二男 僕はどうでもいゝ、隨意にしたまへ。併しどういふものかしらん。
(と胸に氣をかける)

阿 構ふまい、こんな機會は無いから、そつと持つていつて飛行器を打つて見なさい。

倉部 (突然に) 愉快!

と大聲に叫ぶ。

阿 何だ。

倉部 いえ上川さん、戦地に行つたら、僕にもその機關砲を使はして下さい。

い。

上川 おゝ、君と代るくだ。
倉部 有難いな!

と雀躍する。

不二男 (思入あつて) 上川君、幸ひ大將閣下の前だが、かうなれば須賀子との約束ももごとくにしてくれるだらうな。

上川 勿論、それは僕から願ふ所だ。——須賀子さん、其節は御無禮を申しました。

須賀子 どう致しまして。

と面はゆき介。

阿 上川少佐、お前も何ちやつたらうが、須賀さんは外へは嫁かんと言つて斯うなるのを待つてゐられたぞ。

上川 やどうも。

(1011)

と頭をかく。
須賀子も向うを向く。

上川 いや、軽々しくならん事がある。僕は明日にも南亞米利加の戦争に出かけなければならん。すると命もあるか無いか分らん。約束は違つてからにして貰はう。

不二男 なアに、そんな事を何も思ふ妹ぢやない。なア須賀さん。
須賀子 うなづく。

上川 でも、須賀子さんの一生の不幸になるといかん。

阿 此れよ上川、軍人は何時だつて無い命だ。そんな事を言はずと男らしく約束をして行け。

上川 (寸考) 成程、では約束を致します。天地に誓つて。
阿 さうだ。

と皆々悦びの思入。
奥にて鈴の音。

小使 来る。

小使 院長、もう時刻でございます。

不二男 よし、須賀さん、御案内を。

須賀子 はい。さア皆さんどうぞ、あちらへ。

阿(思入あつて不二男に向ひ) いや、柴山少佐、機關砲を發表した以上は、無論現役になつてくれるだらうな。

不二男(思入あつて) 大將閣下の御配慮は有難うございますが、私はここまで廢兵の世話を致すつもりであります。

上川 なせ。君の様な有爲の人物が引込んでゐるといふ事は無い。

不二男 いや、事ある時は又格別、平時はこれを生涯の事業にする積りだ。
阿 うむ(盛歎の介) 愈々見上げた精神、それでこそ誠の日本武士ぢや……

(1013)

と立つ。一同よろしく思入。
奥にて饒やかなる軍樂の音。

(一〇四)

(大團圓)

〔餘興〕 同じく娛樂室

(此の段需めによりて特に書き加ふ。)

平舞臺、正面の奥を一段高くして假りの舞臺を設け、
白く櫻の紋を染めぬきたる桔梗色の幕を垂れ、舞臺の
左右及處々杉葉と草花とにて裝飾を施し、前には椅子
腰懸等を並べて觀覽の席となす。けふ廢兵院創立一周
年の紀念日にて來賓などあるまうけの心なり。
鈴の音にて下手より廢兵數名役員に導かれて登場し、
腰掛にかゝる。
擔架に臥せしまゝ机の上に置かるゝ重症者もあり。
第二の鈴にて院長柴山不二男大禮服同じく須賀子白襟

(一〇五)

紋服先に立ち、岡大將を始め二三の將校、赤十字社員、愛國婦人會有志及び廢兵の家族親知其他の來賓を案内して着席せしむ。
樂隊君が代を奏す。

長演

今日は私立廢兵院創立一周年の祝賀會に斯く皆様の御臨席を忝うし、光榮の至りであります。本廢兵院の設立は、昨四十年十月廿二日でありまして、帝國陸軍省を始め、日本赤十字社、愛國婦人會、及び遠近篤志家諸君の深厚なる同情の下に成立し、今日まで全一ヶ年、收容の廢兵二十一名に達しました。御承知の如く官設の廢兵院は各師團管下に設立せられ、既に約一百人の廢兵を收容してありますが、全國に於ける廢兵の總數は一萬人以上もありまして、事新しく申すまでも無く、皆國家の爲めに身命を抛ち、忠勇無比の働きをなして終

身の不具に陥つた最も同情すべき人々であります。官設の廢兵院では地方官廳の調査に随つて經費の範圍内に於て可成遺憾なく收容され、既に十分な成績もあがつてをりますが、まだ收容漏れの者のうち、打ち棄て、置き難い不幸の状態のものも數多あります。本院は即ち是等を捜し且つ收めて慰藉を與へんことを目的としたのでありまして、目下の處は設備萬端、我々の意に任せぬことも數多ありますが、そこは又博愛義俠なる諸君子の芳情と私共當事者の忠實なる誠心とを以て、少くとも精神的満足だけは十分に與へたいといふ希望であります。當廢兵に於きましても、諸君子の厚き御同情は、絶えず十二分に感謝を致してをりますので、小官より代つて御禮を申述べます。——今日は一周年祝賀會の餘興として諸方より演藝數番の御寄附がございました。松川藏人氏の薩摩琵琶、慰佐雄會社中の三曲、藤浪秋雨女史の西洋手品、都築美聲氏の義太夫及入佐秋子嬢の

新曲などであります。尙書廢兵の意匠になりました假裝行列を御覽に入れます。何卒ゆるく御遊びの程を願ひます。

と降壇。來賓拍子。

玉置歌

「夫れ魂は冥漠に歸し魄は地に歸す。忠心義肝の英靈は、永く中有に住りて、極天后土を護るとかや。合こゝに相模國三浦の郡葉山の里は東海の、砂暖き濱邊にて、長くも我が皇后の宮陛下には、寒き師走の木枯を、暫くこゝに避け給ふ。合波白妙にはのく、霞む島曲の朝景色、磯の松風風々の、夕べの調べも御威に入り、御景色晴れさせたまひしが、折しも御國に大難あり、國交破れ民草の、兵馬の役や起らんと、假の宮居の夜殿にも、御夢いと安からず。合さる程に如月六日の事かよ、夜も更けわたる階前に、白衣着けたる被髮の武士、御前に向ひひれ伏して、微臣は南海の阪本龍馬と申

す者にて候。此度戦起り候とも、努御心を惱まし玉ふべからず。數にもあらぬ草の葉の、薄き此の身に候へども、一念精に凝るときは、山をも碎く例あり。我が海軍は微臣が、必ず護りて候へば、水の上なる御軍は、勝利疑ひ候はず。御心安く覺召され候へかしと、言ふかと思れば忽ちに、姿は消えて無かりけり。合皇后の宮は御夢破れ、不思議の事と思せども、怪神亂鬼を信せじと、その儘秘しておはし、が、續く七日の夜もまた、同じ夢をぞ御覽じける。門に呼ぶもの三人にして、曾子が母も走りしといへり。いでや証憑を見てんとて、往んじ慶應の三年、西の京に果てしと聞く、阪本龍馬とやらんの寫像やある。仰せに侍臣一枚の、寫真求めて奉る。御手に取らし視たまへば、合眼鋭く眉鬚り、肉落ち髪もおごろにて、王事に身を委す三十年、劍の下に奔馳せし、實に憂國の神なれや。合二夜の夢にまざくと、殘る勇士の其面影、二重がさねの撫肩に、桔梗の紋の末

までも、露達はぬぞ不思議なる。皇后さてはと此由を、主上へも奏
させたまひしが、一日をも時をも過さずして、翌くる八日の開戦に、
我海軍は目覚ましき、旅順の捷をぞ得たりける。合 あはれ往年波荒
き、周防の灘の海上に、幕府の艦を襲撃せし、龍馬の霊や今いづこ、
忠魂義魄は沈勇の、東郷中將に憑れるか、不敵の膽は壯烈の、廣瀬
中佐に宿りしか。瑞夢のしるし今更に、尊くもまた頼もしき。」

と喝采の裡に演じ了り、次に三曲松竹梅の演奏はで
やかにありて廢兵の假裝行列となる。

重幕揚ると、舞台の後ろは日比谷公園祝賀會の書割
に變り、饒かなる洋樂の音につれて、下手より鎌倉
權五郎景政、曾我の十郎祐成、山本勘助晴行、刀鍛
冶五郎正宗、森蘭丸、小まん、塙保巳一、茨木童子
などに扮したる廢兵練り出づ。

一同喝采。

「あのお丁ひのは誰れたらう」目に矢の立つてゐる人は
誰でせう」めくらの坊さんは蟬丸でございませうかな
どのセリフ、來賓中思ひくにあるべし。
假裝の人物やがて正面に向ひ、名々に名乗る。一同
喝采。

この時小使出で電報を上川に渡す。

上川(受取り、讀みて) 本部から直ぐ出發しろと言つて來た。失敬しよう。(立ち上る)

不二男 さうか。では鳥渡……………

と樂隊に中止を命ず。

假裝の連中不審の顔して立止まる。

上川(岡に向ひ) 本部から出發の命令が參りました。

岡 うむ、行つてくれるか。

上川 すぐ出發致します。(不二男に向ひ) 柴山君、ではこゝでお別れだ。

不二男 お、確かりやつて来たまへ。

と握手。

岡 右源太、すぐ立つんだぞ。

倉部 は、いつでも出かけます。

須賀子(思入あつて) どうぞ御無事に、あのお體を御大切に。

上川 あり難う。あなたも御健康で。

岡(兩手と舉げ) 上川少佐萬歳！
來賓、廢兵、假裝の連中も一同に

一同 上川少佐萬歳！

榎五郎に扮せる廢兵 私立廢病院萬歳！

榎五郎 私立廢病院萬歳！
柴山院長萬歳！

一同 柴山院長萬歳！

上川 大日本帝國萬歳！

一同 大日本帝國萬歳！

岡 天皇陛下萬歳！

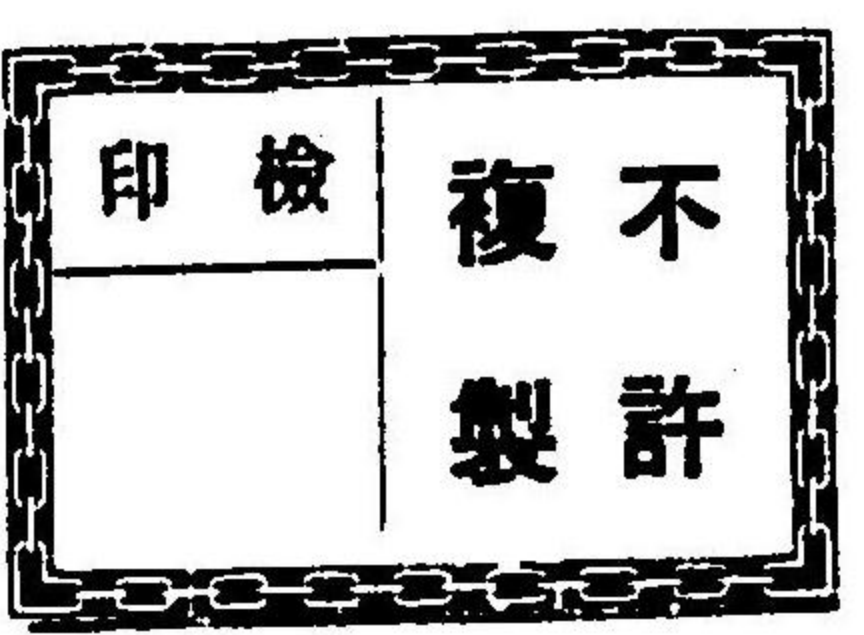
一同 天皇陛下萬歳！

此の模様よろしく、勇ましき軍樂にて芽出度打出。

教育本
功と罪
をばり

(114)

明治四十一年一月廿五日印刷
明治四十一年一月廿五日發行



著者

發行者

右代表者

印刷者

印刷所

功と罪奥付

定價一冊金參拾五錢

杉谷虎藏

東京市麹町區九段坂下牛ヶ淵
通俗教育會

東京市麹町區九段坂下通俗教育會内
日高藤吉郎

東京市麹町區上六番町六番地
岩脇三子吉

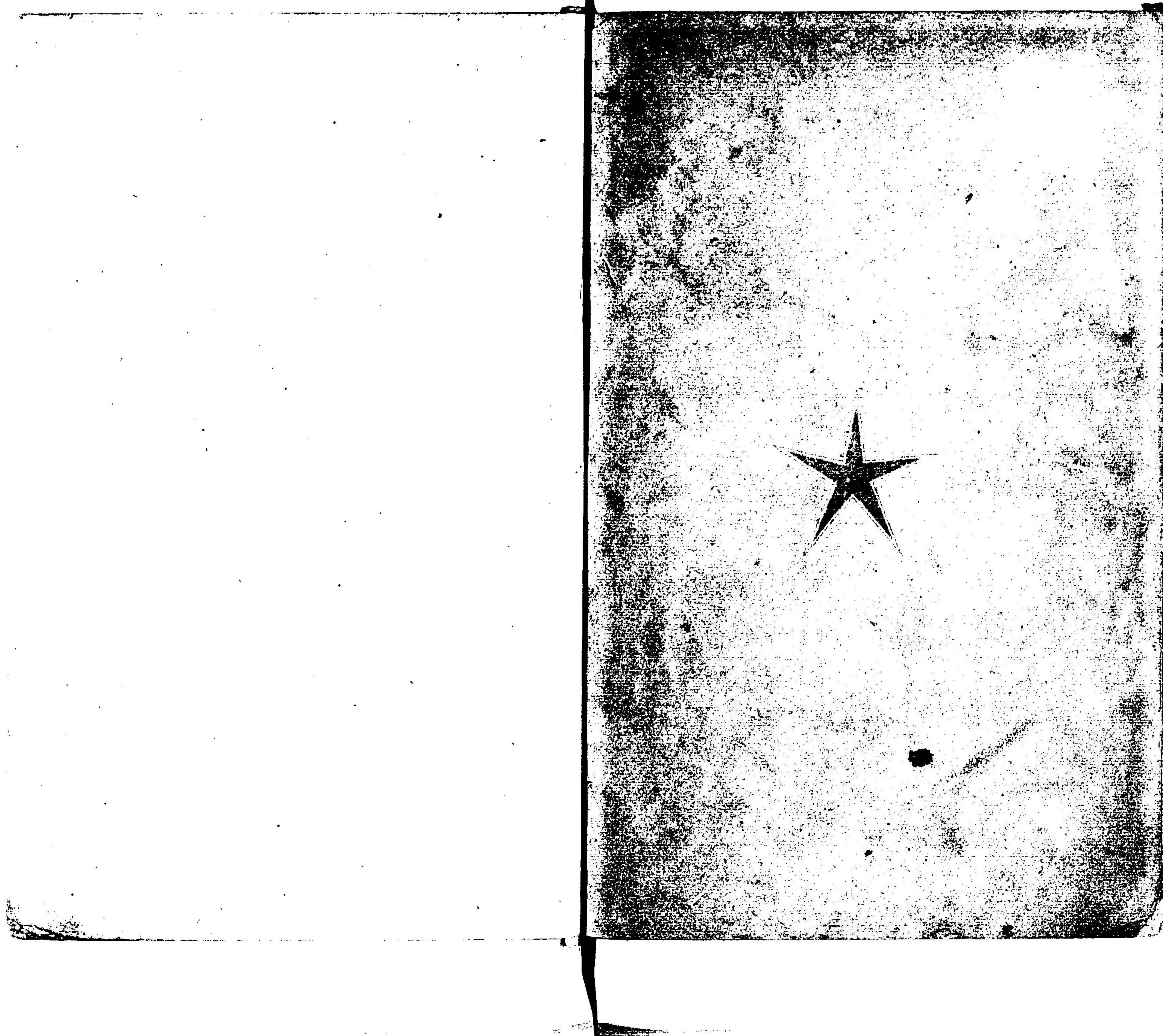
東京市牛込區横町七番地
日清印刷株式會社

發賣所

東京市麹町區
上六番町六番地

久遠堂書店

26
1147



26
447

